岡山県埋蔵文化財発掘調査報告131

水別古墳群・水別遺跡

一般県道別所下長田線
雪寒(凍雪害防止)事業に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告131

水別古墳群・水別遺跡

一般県道別所下長田線
雪寒(凍雪害防止)事業に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

巻頭図版

１．１号墳検出状況（東から）

２．１号墳石室内遺物出土状況（北から）

序

岡山県の最北端に位置する蒜山高原は、県内でも有数の観光地であり、四季を通じて美しい自然がみられることから、県内外から毎年多くの観光客が訪れております。また、この地域は四つ塚古墳群をはじめ、早くから文化財の調査および活用がはかられ、全国的にも著名な遺跡が数多く残っているところでもあります。

一方、この地域では、観光客の増加や物資輸送の増大に伴う道路の整備に加え、冬季における通行の確保がかねてからの課題となっておりました。なかでも、一般県道別所下長田線は道路の幅員が狭いうえに、損傷も激しいことから改良工事の必要性が指摘されておりました。

岡山県教育委員会は、工事計画予定地に係る遺跡の取り扱いについて関係機関と協議を重ねてまいりました。その結果、やむをえず破壊される部分については記録による保存措置をとることになり、平成8年度に第1次調査、つづいて第2次調査を実施いたしました。調査の結果、3基の古墳が発見され、なかでも1号墳は良好な状態で残存しており、須恵器や装身具など多くの遺物が検出されました。これらの遺構・遺物はこの地域の歴史を考えるうえで大変貴重であります。この報告書が文化財の保護・保存、さらに地域の歴史を解明する一助になれば幸いです。

最後に発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、真庭地方振興局、八束村役場、蒜山教育事務組合教育委員会および地元関係各位から賜りました御指導と御協力に対し、厚くお礼申しあげます。

平成10年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　籔　本　克　之

例　言

1．本書は、岡山県教育委員会が、一般県道別所下長田線（公）雪寒（凍雪害防止）事業に伴い、岡山県真庭地方振興局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した水別古墳群・水別遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡は、真庭郡八束村下長田488―1に所在する。

3．今回発見された遺跡は、遺跡地図には明記されていなかったが、今回の調査で古墳群を中心とする遺跡であることが判明した。そこで、この地区の小字が「水別（みずわかれ）」であったことから、この遺跡を新たに水別古墳群・水別遺跡と呼称することにした。

4．調査は、第1次調査（確認調査）を平成8年4月22日から平成8年4月23日まで、第2次調査（全面調査）を平成8年6月24日から平成8年9月30日まで実施した。調査面積は計400㎡である。

5．調査は第1次調査を岡山県古代吉備文化財センター職員柴田英樹が、第2次調査を岡山県古代吉備文化財センター職員大橋雅也・金田善敬が担当した。

6．発掘調査にあたっては、真庭地方振興局建設部、八束村役場、蒜山教育事務組合教育委員会から多大な援助を受けた。また、下記の方々からは遺跡全般にわたり有益な御教示を得た。記して感謝します。（五十音順・敬称略）　亀田修一　小林博昭　近藤義郎　白石純　妹尾護　新納泉　野崎貴博　浜隆造　美甘隆夫

7．報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて、平成9年10月から平成9年12月まで、文化財センター職員の協力を得て、金田が担当した。

8．本書の編集・執筆は、大橋、柴田と協議のうえ、金田が担当した。

9．古墳から出土した歯については、小橋進氏（岡山県歯科医師会法歯会専務理事）に依頼し、鑑定を行った。

10．遺物写真については江尻泰幸氏の協力を得た。

11．第4図の写真については八束村より提供を受けた。

12．出土遺物、実測図、写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡　例

1．本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は、第１図・第２図は真北である他は基本的に磁北である。

2．本報告書で使用した高度はすべて海抜高である。

3．本書の第２図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図「蒜山」を複製し、加筆したものである。

4．本報告書の遺構ならびに遺物の実測図の縮尺率については図示または明記しているが、基本的に下記のとおりである。

　遺構：墳丘測量図（１/80）　石室実測図（１/40）

　遺物：土器（１/４）　鉄器（１/２）　装身具（１/２・１/１）　石器（２/３）

5．土層断面図等の土色および土器の色調は『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修）を参考に記述している。

6．遺物番号のうち、土器以外のものについては材質等により下記に示すように頭に略号を付した。

　金属製品（M）　玉類（J）　石器（S）

7．土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは小破片のため、復元が困難であり、口径の不確かなものである。

8．写真図版のうち、遺物写真の番号は掲載遺物番号と一致する。

本文目次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　発掘調査の経緯と経過 …… 4
　第１節　調査にいたる経緯 …… 4
　第２節　発掘調査・報告書作成の経過 …… 4
　第３節　発掘調査・報告書作成の体制 …… 5
　第４節　日誌抄 …… 6
第３章　発掘調査の概要 …… 7
　第１節　第１調査区 …… 7
　第２節　第２調査区 …… 31
第４章　まとめ …… 33
遺物観察表 …… 36
付　載　水別古墳群出土の歯の鑑定について …… 40

挿図目次

第１図　遺跡位置図（黒丸印）
第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）
第３図　調査区位置図（1/1,000）
第４図　移築された水別１号墳（手前）と２号墳
第５図　調査前地形測量図（1/150）
第６図　調査後地形測量図（1/150）
第７図　１号墳調査後墳丘測量図（1/80）
第８図　１号墳墳丘断面図（1/80）
第９図　１号墳石室および外護列石平面図および立面図（1/40）
第10図　１号墳外護列石断面図（1/40）
第11図　１号墳石室閉塞状況および遺物出土状況（1/40）
第12図　１号墳石室実測図および遺物出土状況（1/40）
第13図　１号墳出土須恵器（1/4）
第14図　１号墳出土鉄器（1）（1/5・1/2）
第15図　１号墳出土鉄器（2）（1/2）
第16図　１号墳出土耳環・玉類（1）（1/2）
第17図　１号墳出土玉類（2）（1/1）
第18図　１号墳墳丘および周辺部出土土器（1/4）
第19図　２号墳調査後墳丘測量図（1/80）
第20図　２号墳墳丘断面図（1/80）
第21図　２号墳石室実測図および遺物出土状況（1/40）
第22図　２号墳出土須恵器（1/4）・鉄器（1/2）
第23図　２号墳出土耳環（1/2）・玉類（1/2・1/1）
第24図　２号墳墳丘および周辺部出土土器（1/4）
第25図　３号墳調査後墳丘測量図（1/80）
第26図　３号墳墳丘断面図（1/80）
第27図　３号墳石室実測図（1/40）
第28図　３号墳墳丘および周辺部出土土器（1/4）鉄器（1/3）
第29図　１区出土土器（1/4）
第30図　第２調査区平面図および断面図（1/80）
第31図　第２調査区出土石器（2/3）・土器（1/4）
第32図　水別１号墳石室内下顎骨片周辺部出土歯（1/1）

図版目次

巻頭図版

1．1号墳検出状況（東から）

2．1号墳石室内遺物出土状況（北から）

図版1－1　1区調査前地形（南から）

－2　1区調査前地形（東から）

－3　水別古墳群全景（東から）

図版2－1　1号墳調査前（東から）

－2　1号墳表土除去後（東から）

－3　1号墳全景（東から）

図版3－1　1号墳石室閉塞状況（北から）

－2　1号墳石室前庭左側壁（南から）

－3　1号墳石室前庭右側壁（北から）

図版4－1　1号墳石室奥壁（東から）

－2　1号墳石室左側壁（東から）

－3　1号墳石室右側壁（東から）

図版5－1　1号墳石室玄門（西から）

－2　1号墳石室全景（東から）

図版6－1　1号墳石室内遺物出土状況（東から）

－2　1号墳石室内遺物出土状況（西から）

－3　1号墳石室内刀出土状況（東から）

図版7－1　2号墳検出状況（東から）

－2　2号墳石室全景（東から）

－3　2号墳石室（北から）

図版8－1　2号墳石室奥壁（東から）

－2　2号墳石室玄門（西から）

－3　2号墳石室内遺物出土状況（東から）

図版9－1　3号墳調査前（北から）

－2　3号墳石室全景（東から）

－3　3号墳全景（東から）

図版10－1　2区全景（北から）

－2　2区東壁断面（西から）

－3　石器出土状況

図版11　1号墳出土土器（1）（1/3）

図版12－1　1号墳出土土器（2）（1/3）

－2　1号墳墳丘および周辺部出土土器（1）（1/3）

図版13－1　1号墳墳丘および周辺部出土土器（2）（1/3）

－2　1号墳出土鉄器（1/5・1/2）

図版14－1　1号墳出土耳環・玉類（1）（2/3）

－2　1号墳出土玉類（2）（1/1）

図版15－1　1号墳出土玉類（3）（1/1）

－2　2号墳出土土器（1/3）・鉄器（1/2）

図版16－1　2号墳出土耳環（2/3）・玉類（2/3・1/1）

－2　3号墳出土土器（1/3）・鉄器（1/3）

－3　1区・2区出土土器（1/3）・石器（1/1）

表目次

表1　土器観察表

表2　鉄器観察表

表3　耳環観察表

表4　玉類観察表

表5　ガラス玉観察表

第１章　地理的・歴史的環境

岡山県真庭郡八束村は岡山県の最北端に位置し、蒜山盆地の東半部に位置する村である。蒜山盆地は南側の中国山地（真庭山地）と北側の上蒜山、中蒜山、下蒜山の間にはさまれた東西約20km、南北約８kmの盆地である。県境をなす上・中・下蒜山は第三紀末または第四紀のはじめに形成された火山で、蒜山盆地はその南麓に広がる蒜山原とその南の沖積平野からなる。蒜山盆地はかつて東西に長い古蒜山原湖であり、日本海に注いでいたが、その後、大山の噴火により流路がさえぎられ、かわって山陽側に流出し、旭川水系に組み込まれた。そのため、かつての湖底は干上がり、旭川による浸食によりほぼ現在の地形が形成された。

蒜山盆地には旧石器時代から数多くの遺跡が分布している。特に旧石器時代の遺跡は早くから注目され、鎌木義昌氏、小林博昭氏、白石純氏らを中心に行われてきた。また、近年では開発に伴う調査が進み、川上村城山東遺跡（下澤他1995）、川上村中山西遺跡（下澤他1995）、八束村上野遺跡（平井1995）の調査がなされている。この地域の旧石器時代の遺跡が特に注目されるのは、遺物包含層が火山灰中に位置付けられ、年代を明確に把握することが可能であるからである。その中でも特に大きな指標となっているのが、姶良火山灰層である。姶良火山灰層は九州南部から飛来してきた火山灰で、B.P 22000年～21000年の年代が与えられている。本報告の水別遺跡でもこの姶良火山灰層が検出され、この層下より石器が出土した。このように姶良火山灰層下で遺物が検出された遺跡としては八束村戸谷遺跡（鎌木・小林1986）がある。戸谷遺跡では第一地点、第四地点、第五地点で姶良火山灰層下で遺物包含層が検出されている。中でもこの第１地点では姶良火山灰層下から石英剥片を中心とした石器群が出土した。また、八束村上野遺跡でも姶良火山灰層下から約250点あまりの石器が検出された。

縄文時代および弥生時代の遺跡については分布調査などで多くの遺跡が確認されており、土器や石器が採集されている。しかしながら、実際に調査が行われた例は少なく、あまりよくわかっていないのが現状であるが、八束村では上野遺跡（平井1995）で縄文時代のものと考えられる落とし穴がみつかっている。また、この水別遺跡でもわずかではあるが、縄文土器片が出土している。

一方、古墳時代については古墳を中心に調査例がある。特に近藤義郎氏による四つ塚古墳群の調査は著名である（近藤1954・1992）。四つ塚古墳群は19基ほどの群集墳である。発掘調査が行われたのは１号墳と13号墳である。13号墳は造出しをもつ円墳で木棺直葬墳であり、須恵器等の遺物が出土している。また、１号墳は径24mの円墳で、この地域においては初期の段階の横穴式石室をもつ。石室は片袖で、長方形の平面プランを呈する。石室は乱掘されているが、数多くの遺物が出土してい

第１図　遺跡位置図（黒丸印）

1．水別古墳群・水別遺跡
2．大栃古墳
3．林１・２号墳
4．林遺跡
5．原林遺跡
6．寺原寺跡
7．長田神社東遺跡
8．長田神社東奥遺跡
9．狐谷遺跡
10．上在所遺跡
11．湯頭遺跡
12．湯頭Ｂ遺跡
13．上野古墳群・上野遺跡
14．東下遺跡
15．東遺跡
16．上野中遺跡
17．戸谷遺跡第１地点
18．戸谷遺跡第２地点
19．牧野遺跡第５地点
20．戸谷遺跡第６地点
21．戸谷遺跡第４・第５地点
22．牧野遺跡第４地点
23．牧野遺跡第３地点
24．牧野遺跡第２地点
25．牧野遺跡第１地点
26．上林経塚
27．笹畝遺跡第１地点
28．四つ塚古墳群
29．一ツ塚古墳
30．花園新田遺跡
31．笹畝遺跡第２地点
32．笹畝遺跡第３地点
33．宇田遺跡
34．中野遺跡
35．道目木遺跡
36．竜頭遺跡
37．道目木Ｂ遺跡
38．美田野遺跡
39．中津加茂遺跡
40．定広遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

る。このように、四つ塚古墳群は５世紀から築造が開始され、横穴式石室が導入された６世紀中葉まで営まれたと考えられる。なお、蒜山地方において古墳の調査はあまり行われていないが、分布調査により多くの古墳の存在が確認されており、本報告の水別古墳群の周辺にも古墳が存在している。大栃古墳は水別古墳群の間近にあった古墳であったが、昭和41年に県道別所下長田線の拡張工事により破壊され、須恵器壺および大刀が出土したと報告されている。また、林の古墳（近藤1992）は横穴式石室と考えられる古墳で、瑪瑙製の勾玉が採集されている。付近では須恵器片も散在しているようであり、古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳群が分布していると考えられる。これらの古墳群は未調査のため、詳細な築造時期等は不明であるが、本報告の水別古墳群と同様、四つ塚古墳群以後に営まれた可能性もある。これらの古墳群はこの地方における古墳時代後期から終末期にいたる古墳の埋葬儀礼の変遷を考えるうえで重要な資料である。

参考文献

岡山県教育委員会　1978　『岡山県遺跡地図』第五分冊

鎌木義昌・小林博昭　1986　「戸谷遺跡」『岡山県史』第18巻

近藤義郎　1954　『蒜山原－その考古学的調査－』

近藤義郎　1992　『蒜山原四つ塚古墳群』

下澤公明他　1995　『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』　岡山県教育委員会
日本道路公団広島建設局津山工事事務所

高橋　護　1991　「先土器（旧石器）時代」『岡山県史』原始・古代

平井　勝　1995　『下長田上野古墳群・上野遺跡』建設省中国地方建設局倉吉工事事務所
岡山県教育委員会

文化庁　1985　『全国遺跡地図』岡山県

堀川　純　1981　「蒜山原採集の縄文時代遺物」『蒜山研究所研究報告』６号
岡山理科大学

堀川　純　1982　「蒜山原採集の縄文時代遺物」『蒜山研究所研究報告』７号
岡山理科大学

第２章　発掘調査の経緯と経過

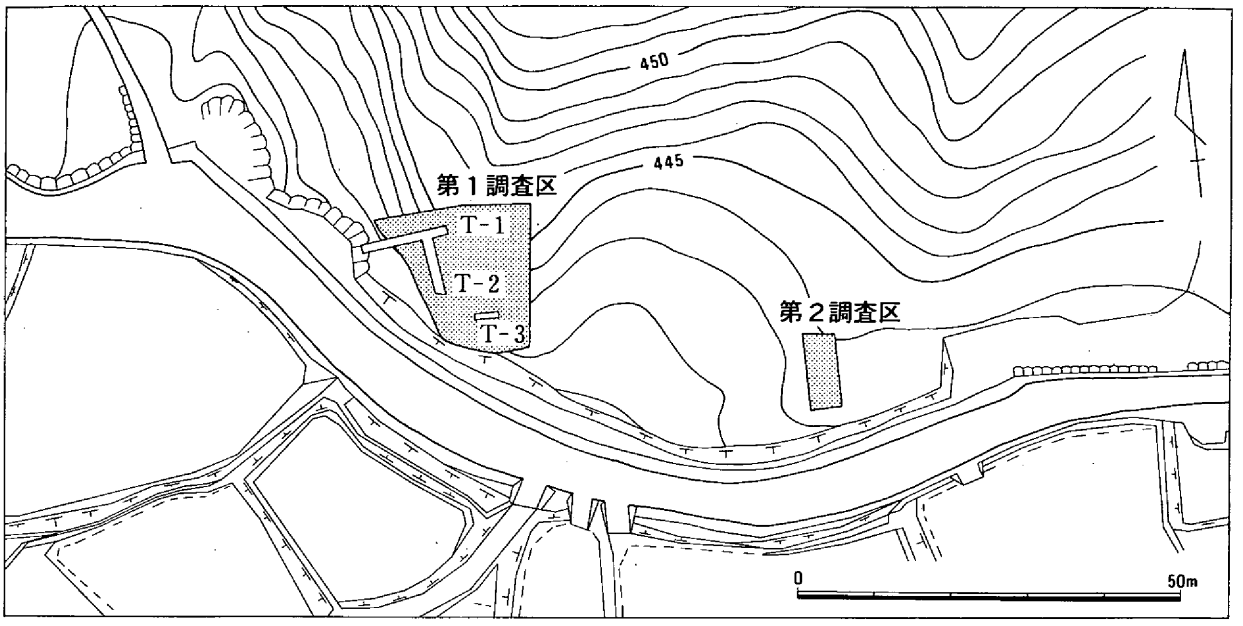
第１節　調査にいたる経緯

岡山県八束村下長田から中和村別所にいたる一般県道別所下長田線は、通勤路あるいは建設資材の運搬道としてひろく利用されているが、舗装も簡易なものであることに加え、冬期におけるタイヤチェーンの使用などのため、路面の損傷が激しく、改修の必要性が生じていた。また、当遺跡の存在した場所は、北からのびる尾根の影響を受けて路線が屈曲しているうえに道路の幅員も狭いことから、除雪作業などにも支障をきたしていた。このため、岡山県真庭地方振興局は、別所下長田線の改良計画を策定した。ところが、平成７年度事業区間内の立木伐採を行ったところ、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性が考えられるようになった。ただちに同振興局は岡山県教育委員会文化課にその有無について照会を行った。これを受け、文化課では遺跡地図の確認ならびに現地踏査を実施したところ、当地区周辺には古墳が点在し、かつて本県道の建設により破壊された古墳（大栃古墳）に非常に近接していること、また石材の存在などが判明した。これにより当地区が埋蔵文化財包蔵地であることが確認され、同振興局は平成８年３月11日付けで文化財保護法第57条の３の規定に基づく通知を行い、文化課とその取り扱いについて協議を重ねた。その協議では、第１次調査（確認調査）を実施したうえで、その結果により必要であれば全面調査を行うこととした。

第２節　発掘調査・報告書作成の経過

第１次調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、調査員１名で、平成８年４月22日から23日の２日間にかけて実施した。調査は路線計画予定地内の北から南にのびる尾根の先端部分にトレンチを３ケ所設定して行われた。その結果、古墳に伴うものと考えられる石材および遺物の存在を確認した。そのため、古墳の存在が予想される場所（第１調査区）については全面調査を行う必要があると判断した。また、旧石器時代の遺物を含む火山灰層の存在も予想されたことから、これについても調査区（第２調査区）を設定し、調査を行うこととした。

第２次調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、調査員２名で平成８年６月24日から行った。調査は約１ヶ月ほどで終了する予定であったが、古墳が当初の予想に反して多く発見されたことに加え、比較的良好な状態で検出されたことから、調査は２週間ほどの調査中断をはさみ、９月30日までのべ約50日間にわたり行われた。調査の結果、第１調査区では３基の古墳が存在することが判明した。発見された古墳はいずれも横穴式石室をもつもので、古墳時代後期に築造されたものであった。中でも良好な状態で残存していた１号墳および２号墳からは須恵器、鉄器、装身具などの数多くの遺物が出土した。１号墳は天井石まで残っていたが、調査の安全と効率を図るため、８月20日に重機で天井石を除去した。また、第２調査区では旧石器時代の火山灰層から石器が検出された。これらの成果を受けて、この遺跡の存在する地区の小字（水別）をとり、この地区で発見された遺跡を水別



第３図　調査区位置図（1/1,000）

古墳群・水別遺跡と呼称することにした。また、９月６日には地元の小学生を中心に現地説明会を行い、多くの見学者を得た。なお、調査中に八束村により水別１号墳および２号墳が四ツ塚史跡公園内に移築復元することが決定し、調査の最終段階で横穴式石室の石材の取り上げと搬出が行われた。その後、約３ヶ月間、公園内で復元工事が実施され、現在、一般に公開されている。

報告書の作成は平成９年度10月から12月にかけての３ヶ月間、岡山県古代吉備文化財センターにおいて行われた。報告書の作成は、土器および玉類の実測、写真撮影等に多くの時間を要したが、予定通りに終了した。また、石室内で検出した歯については小橋進氏（岡山県歯科医師会法歯会専務理事）に鑑定を依頼した。

第３節　発掘調査・報告書作成の体制

平成８年度調査体制

岡山県教育委員会

教 育 長　　森崎岩之助

教育次長　　黒瀬定生

岡山県教育庁文化課

課　　長　　大場　淳

課長代理　　松井英治

参　　事　　葛原克人

課長補佐（埋蔵文化財係長）平井　勝

主　　査　　若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　河本　清

次　　長　　高塚惠明

文化財保護参事　正岡睦夫

総務課

課　　長　　丸尾洋幸

課長補佐（総務係長）井戸丈二

主　　査　　木山伸一

調査第一課

課　　長　　高畑知功

課長補佐（第一係長）江見正己

文化財保護主任

大橋雅也（第２次調査担当）

文化財保護主事

柴田英樹（第１次調査担当）

主　　事　　金田善敬（第２次調査担当）

平成９年度報告書作成の体制

岡山県教育委員会

教 育 長　　黒瀬定生

教育次長　　平岩　武

岡山県教育庁文化課

課　　長　　髙田朋香

課長代理　　西山　猛

参　　事　　葛原克人

課長補佐（埋蔵文化財係長）平井　勝

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　籔本克之

次　　長　　正岡睦夫

総務課

課　　長　　小倉　昇

課長補佐（総務係長）井戸丈二

主　　査　　木山伸一

調査第一課

課　　長　　高畑知功

課長補佐（第一係長）江見正己

文化財保護主事

金田善敬（報告書作成担当）

第４節　日誌抄

平成８年

４月22日（月）　第１次調査開始

４月23日（火）　第１次調査終了

６月24日（月）　第２次調査開始

７月26日（金）　３号墳調査終了

９月６日（金）　現地説明会

９月11日（水）　第２調査区終了

９月24日（月）　２号墳調査終了

９月25日（火）　１・２号墳石材搬出

９月27日（金）　１号墳調査終了

９月30日（月）　第２次調査終了

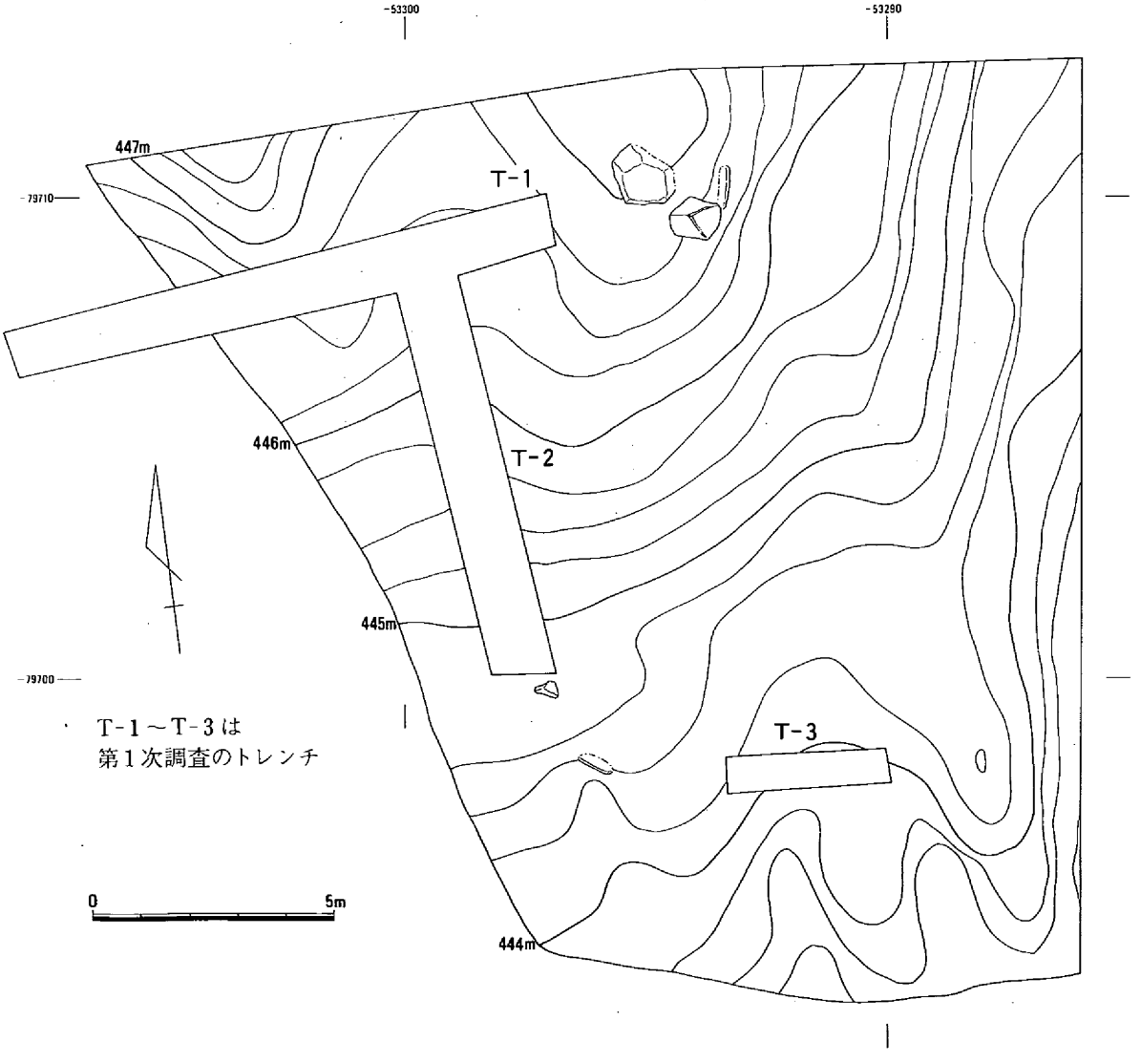
第４図　移築された水別１号墳（手前）と２号墳

第３章　発掘調査の概要

第１節　第１調査区

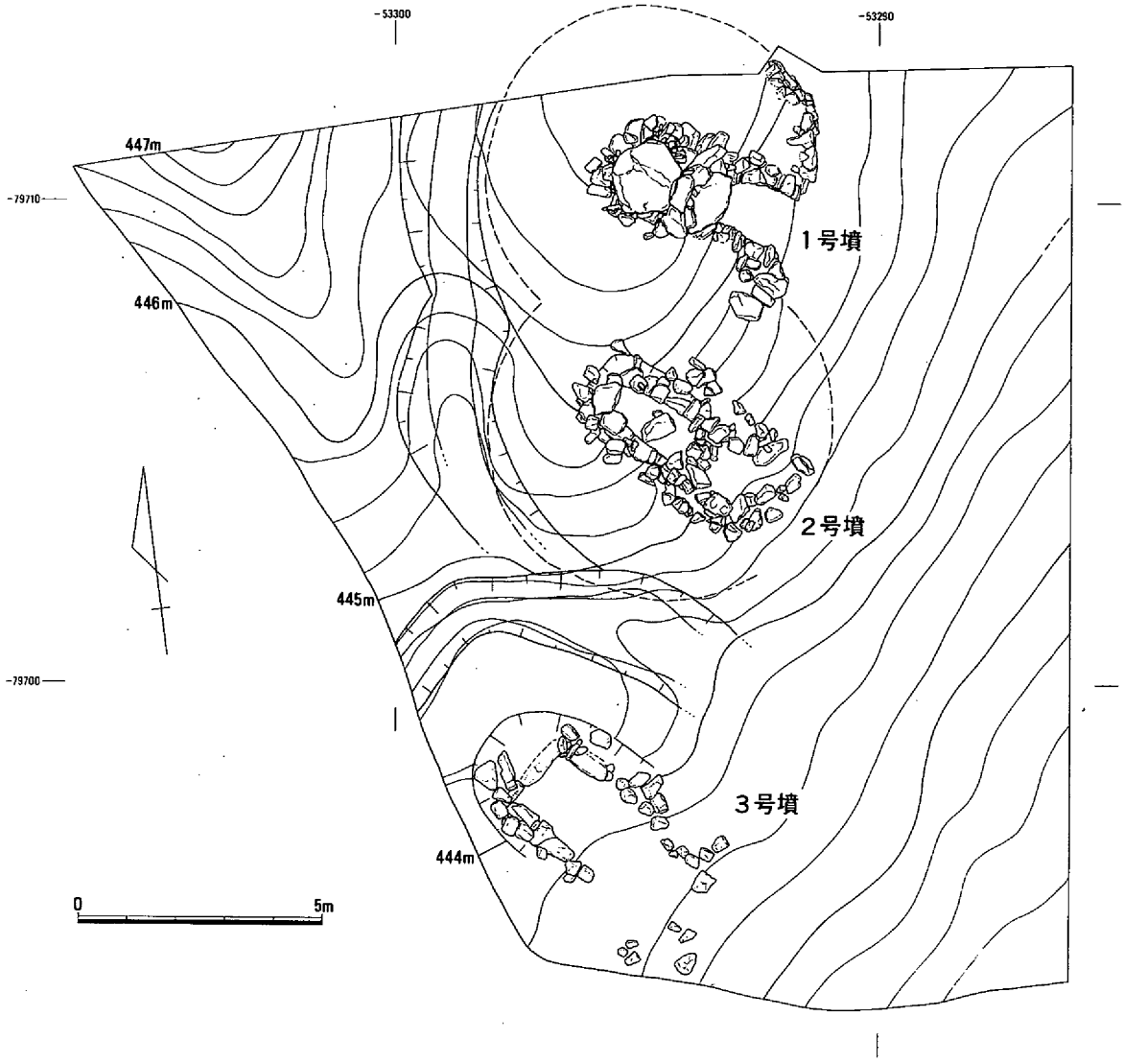
１．調査区の概要

第１調査区は北から南に向かってなだらかにのびる尾根の上に位置する。調査区の西側および南側は道路の敷設により削平されており崖となっている。また、東側は以前に牧草地として利用されていた場所であり、旧地形を改変して整地されていた。周辺には整地の際に掘り起こされたと思われる石がところどころに集積されていた。これらの石は古墳に使用された石材と推測でき、このことから、



第５図　調査前地形測量図（1/150）

この付近にも古墳が築造されていたと思われる。第１調査区では調査以前に植林が行われていたこともあって大きな改変を受けていた。調査区内では古墳の石材がところどころで露出していたものの、周辺の立地などから古墳の残存状況は良くないと予想された。石材が露出していた箇所は調査区北部と南部の２ケ所であり、調査後の１号墳と３号墳に相当する。１号墳は天井石を含め、ほぼ完存していた。３号墳はほとんどが破壊されており、石室の基底部を残すのみであった。また、２号墳は調査中に検出された。２号墳は石室の天井石等が改変を受けていたものの、良好な状態で検出された。各古墳にはいずれも石室を中心に十文字にトレンチを設定し、墳丘盛土の断面観察を行った。１・２号墳からは数多くの須恵器および装身具が出土した。１号墳では、調査の安全と効率を図るため天井石を重機で除去して調査を行った。また、第１調査区では古墳の調査終了後、調査区内の数カ所にトレンチを設定し、第２調査区でみられたような旧石器時代の火山灰層の有無の確認を行ったが、調査区内の火山灰層は２次堆積であり、層ごとに火山灰層を掘り下げていくことはできなかった。また、それに伴う旧石器時代の遺物も検出することはできなかった。



第６図　調査後地形測量図（1/150）

２．水別１号墳

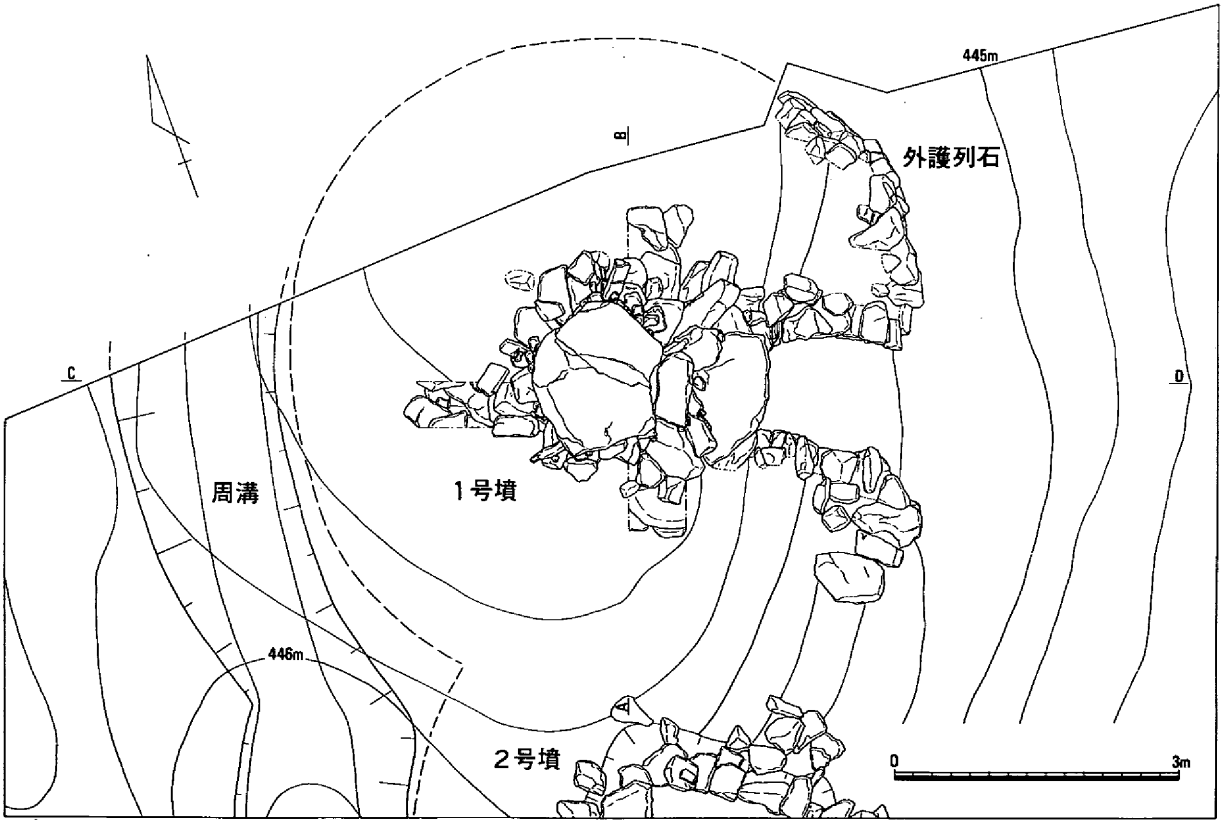
墳丘と周溝（第７図・第８図）

１号墳は調査区の北半部に位置する古墳である。調査前から天井石の一部が露出しており、横穴式石室の存在が想定された。調査が進むにつれて、墳丘の背後には周溝が、また、墳丘の前面には外護列石が存在することが判明した。この周溝および外護列石の検出範囲から、１号墳は径７ｍの円墳であったと考えられる。墳丘の上面は削平されて失われていた。墳丘盛土は黄褐色土が部分的に混ざる黒褐色土（黒ボク）が利用されていた。しかし、土層の観察からは版築といったような痕跡は確認されなかった。盛土は、おそらく背後の周溝を掘削して生じた土を墳丘盛土として利用したものと思われる。１号墳の墳丘は南に隣接する２号墳の盛土により切られていることから、２号墳よりも以前に築造されていたことがわかる。

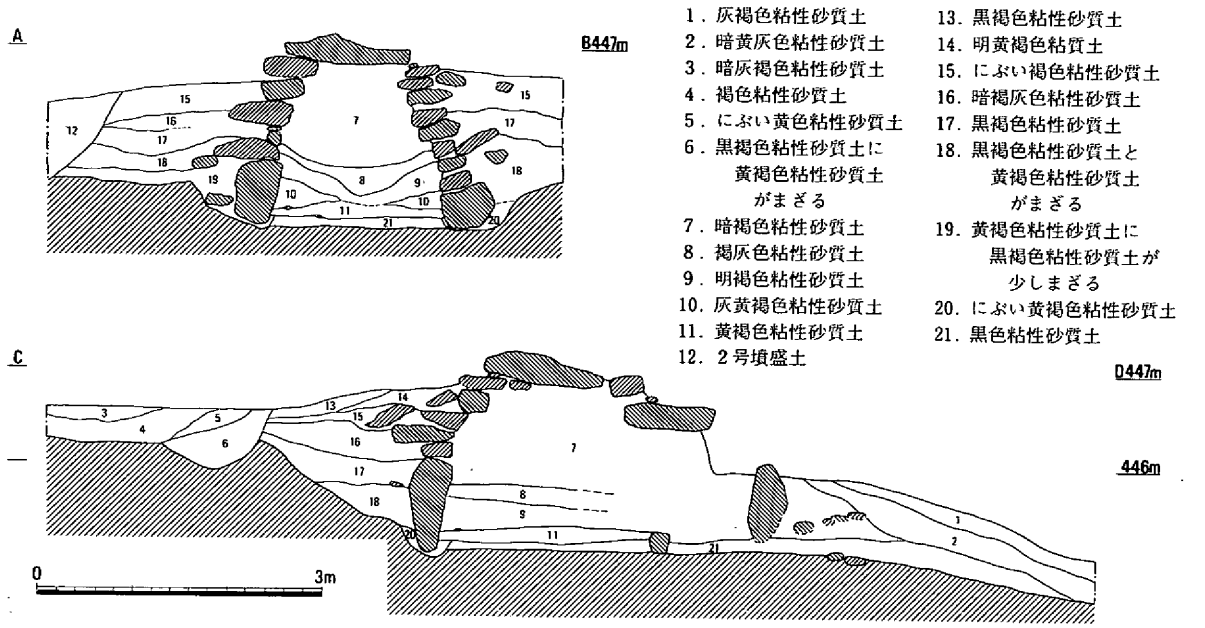
周溝は幅1.6m、深さ0.4mを測り、断面は浅い皿状を呈する。周溝は弧状に墳丘背後をめぐっており、旧地形の尾根と古墳本体を区画していたものと思われる。墳丘の南側では周溝は検出されず、もともと存在していなかった可能性が高い。また、北側は調査区外のため、周溝の様相は不明である。

外護列石（第９図・第10図）

１号墳の墳丘には石室前庭部から左右に外護列石が構築されていた。外護列石は墳丘前面部のみに設けられており、墳丘の背後には存在していなかった。前庭部から北にのびる外護列石は約３ｍにわたって築かれており、約30～60cmほどの石を３～５段ほど積み上げていた。外護列石は調査区境付近



第７図　１号墳調査後墳丘測量図（1/80）



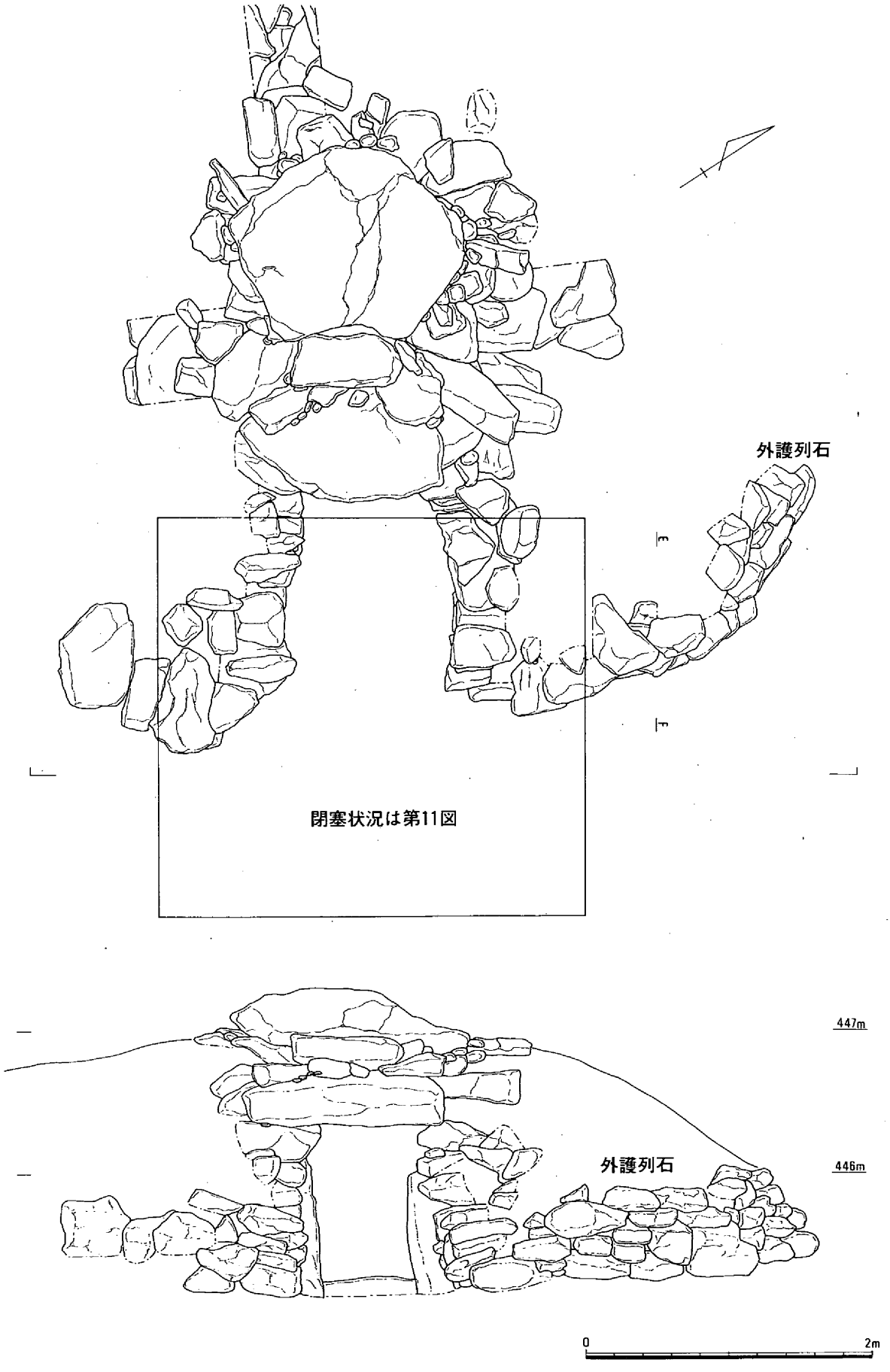
第８図　１号墳墳丘断面図（1/80）

まで設けられていたが、これ以上北にはのびてはいなかった。一方、前庭部から南にのびる外護列石は約1.6mほど設けられているだけで、北にのびる外護列石に比べて短かった。これはもともと長く構築されていたにもかかわらず、２号墳の増築のため、石列が取り除かれた可能性も否定できない。南にのびる外護列石の上部は崩壊しており、残存状況は良くないが少なくとも２段以上石を積み上げていたものと考えられる。

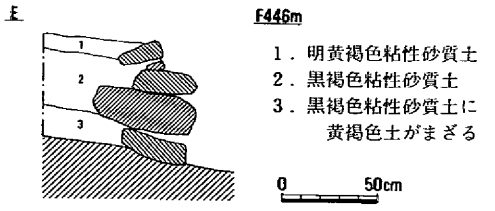
横穴式石室（第12図）

１号墳の埋葬施設は全長約435cmの両袖式の横穴式石室である。石室の主軸はＮ－56°－Ｗである。横穴式石室は前庭部および天井石の一部が破壊されていたが、その他は完存していた。石室の内部は天井部まで土砂で埋まっていた。横穴式石室は、尾根の東斜面上を整地した後に、石材を設定する箇所を中心にやや深く掘削し、そこに石材を据えて構築されていた。玄室は全長225cm、幅210cmの方形を呈している。奥壁は基底部に腰石として高さ約120cmほどの平たい石を立てかけている。腰石の上面からは30～70cmほどの石を小口積みにしている。奥壁は天井部にいたるにつれ、内側に持ち送られている。側壁も奥壁と同様な構造をしており、底部に大きな石材を据え付けて腰石とし、その上から約40～80cmほどの石を小口積みにしている。特に左側壁に使用された基底石は１石のみであり、長さ約210cmの大きな石を用いている。天井部には大きな石を３石ほど使用している。１番大きな石材は長さ165cm、幅125cmを測る。天井石と側壁の隙間には径15cm前後ほどの小さな円礫が差し込まれていた。玄門は高さ120cm、幅65cmを測る。玄門部には左右に袖石が設けられており、高さ105cm、幅35～54cmの石が利用されていた。また、框石が敷設してあり、両端に小さな石が置かれていた。前庭部の側壁には30～50cmほどの石が積み上げられていた。前庭部の右側壁の上部は崩落していた。石室の内部は大きな腰石を基底部に利用しているのに対し、前庭部の側壁は腰石状の石材を用いておらず、石室の内と外で異なった構築方法が採られている。

１号墳の横穴式石室の入口は石材によって閉塞されており、その状況が観察できた（第11図）。石室は前庭部に縦長の石を立てかけ、その前面付近に30～50cmほどの石を積み上げるといった方法で閉塞



第９図　１号墳石室および外護列石平面図および立面図（1/40）



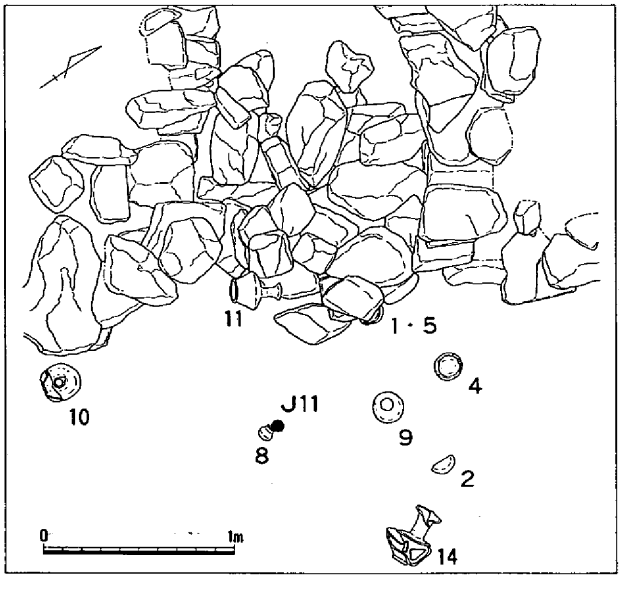
第10図　１号墳外護列石断面図（1/40）

されていた。前庭部の縦長の石は玄門を閉塞する扉石のような性格もあったと考えられるが、平たい板石ではなく、また、玄門を完全に塞ぐことのできる大きさのものでもない。このことから、１号墳の閉塞にはこのような縦長の石をたてかけるのと同時に、小さな塊石を積み上げて閉塞するといった両方の方法が用いられていた可能性がある。

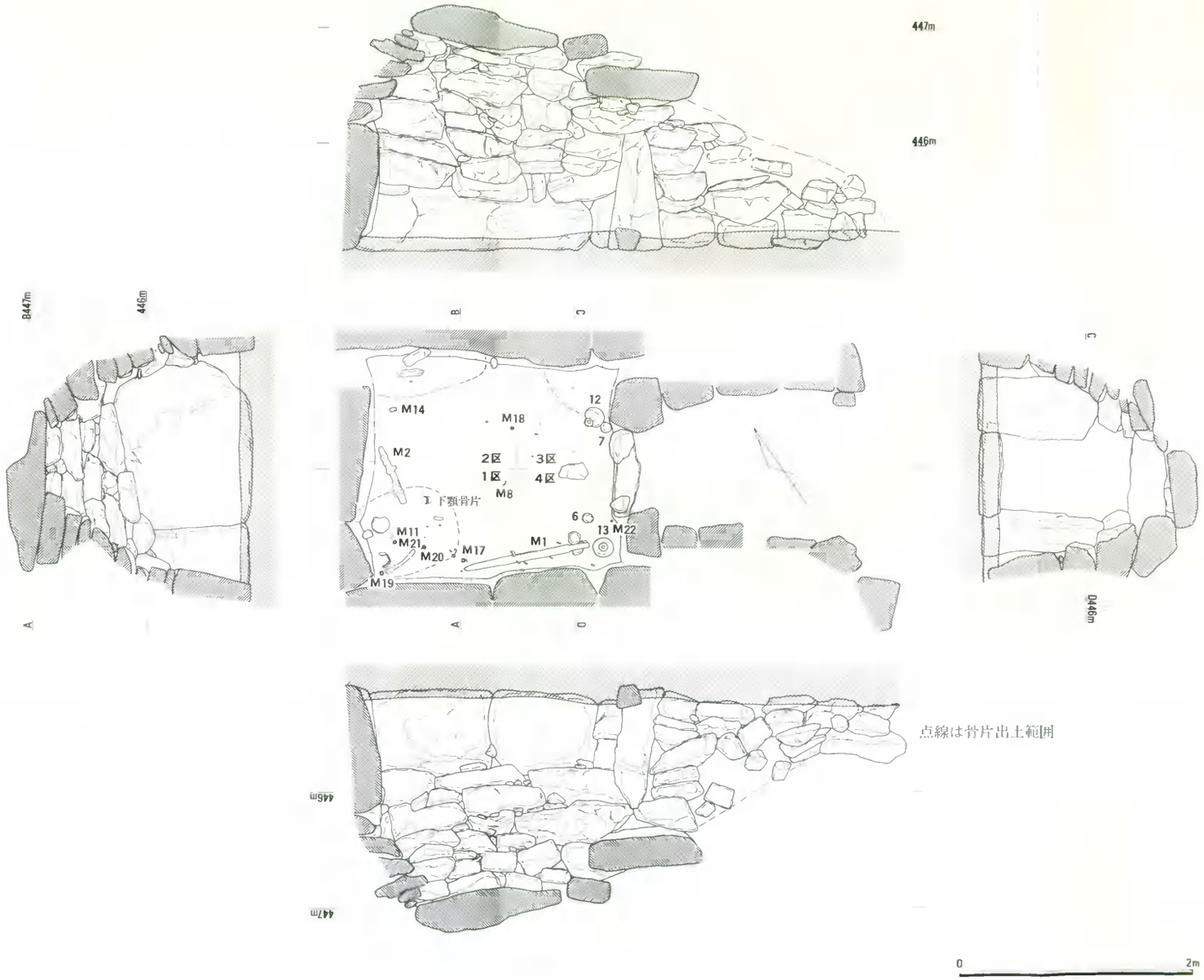
遺物出土状況（第11図・第12図）

１号墳では横穴式石室内、石室前庭部あるいは墳丘周辺から数多くの遺物が出土した。石室内からは須恵器をはじめ、鉄器、装身具が出土した（第12図）。石室内の調査では、石室埋土の土層断面の観察を行いながら遺物の検出を行った。また、石室内を便宜的に四分割（１区～４区）し、それぞれの埋土をすべて水洗した。遺物は主に10層から11層を中心に出土した。

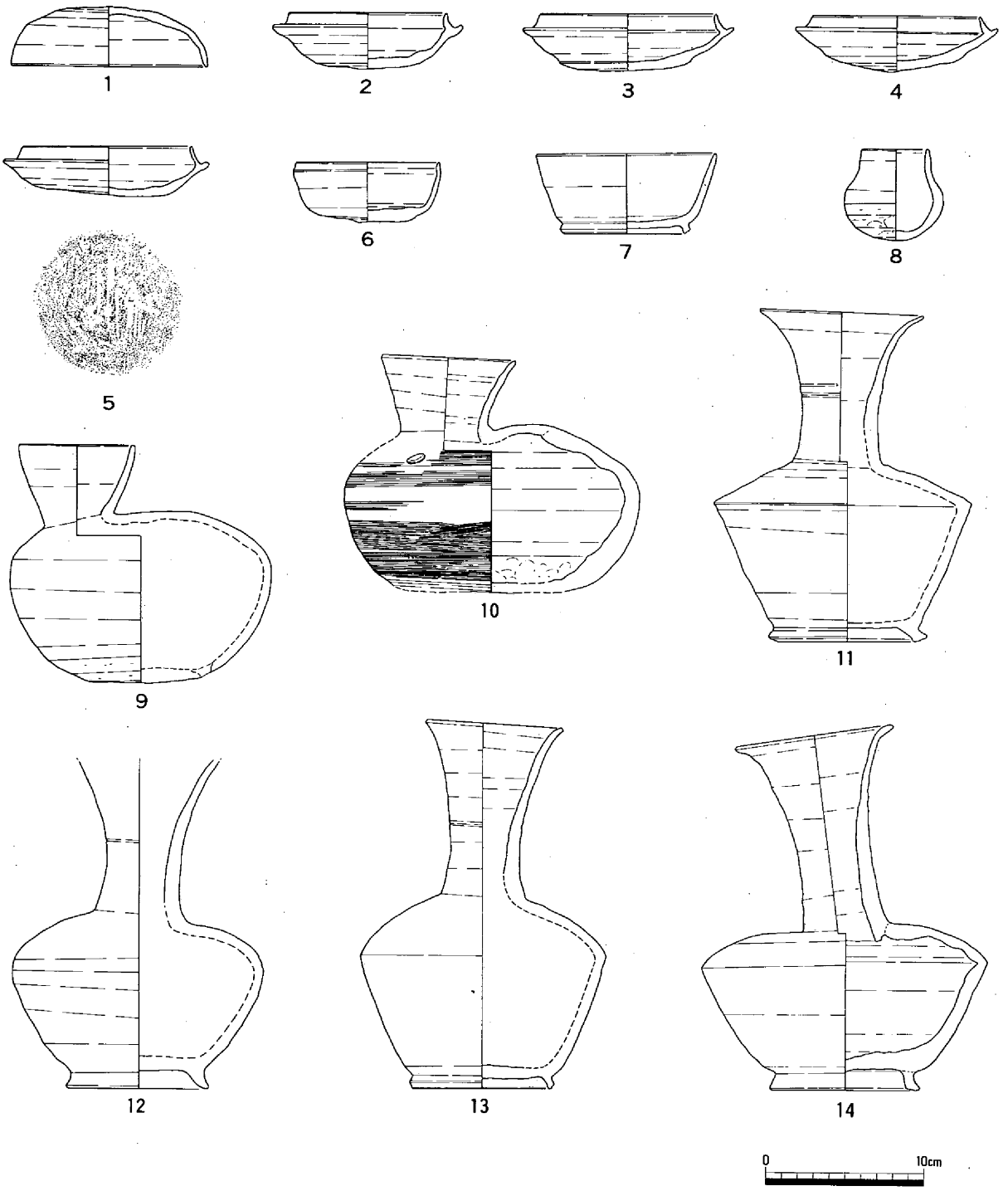
第12図に石室内での遺物出土状況を示した。遺物の散乱状況から、副葬時の状態を保っているものは少ないと思われる。また、初葬時あるいは追葬時の副葬品の明確な分離はできなかった。石室内において最終埋葬に伴うものと考えられる遺物は石室右側壁に沿って出土した大刀（Ｍ１）、石室奥壁付近から出土した刀（Ｍ２）、また、玄室付近の須恵器（６・７・12・13）である。大刀（Ｍ１）は側壁に沿って鋒を奥壁の方向に向けて置かれていた。大刀の茎付近には小石が２つ置かれており、大刀が動かないように小石で固定していたものと思われる。奥壁付近から出土した刀（Ｍ２）は足金具とともに出土したことから、鞘が装着された状態で副葬されたものと考えられる。玄門部の内側では須恵器長頸壺（12・13）および杯身（６・７）が副葬された当時を保っていると考えられる状態で出土した。須恵器は長頸壺と杯身が一緒に出土しており、７と12および６と13がセットになって検出された。石室内からは須恵器片、鉄器片が出土した。これらの遺物は出土状況から追葬等により撹乱を受けているものと推測できる。須恵器片の中には１号墳墳丘東斜面で出土した須恵器片と接合が可能なものもあり、これについては追葬時における掻き出し時に破片として石室内に取り残されたものと考えられる。床面からは装身具が多く出土した。装身具としては耳環、勾玉、管玉、切子玉、ガラス玉などが出土し、特に石室南半部（１区・４区）で多く出土する傾向にあった。石室内の隅を中心に骨や歯の破片が出土した。骨片はその多くが腐朽しており、形状を保ったままの状態で取り上げることは困難であった。骨や歯の破片が良好な状態で出土したのは石室南西隅部（１区）で、頭骨片と推測される骨片や下顎に相当する骨片が出土した。特に下顎骨片ではほぼ一個体分の歯を採集することができた。これについては鑑定を依頼し、20歳ごろの男性の歯との



第11図　１号墳石室閉塞状況
および遺物出土状況（1/40）



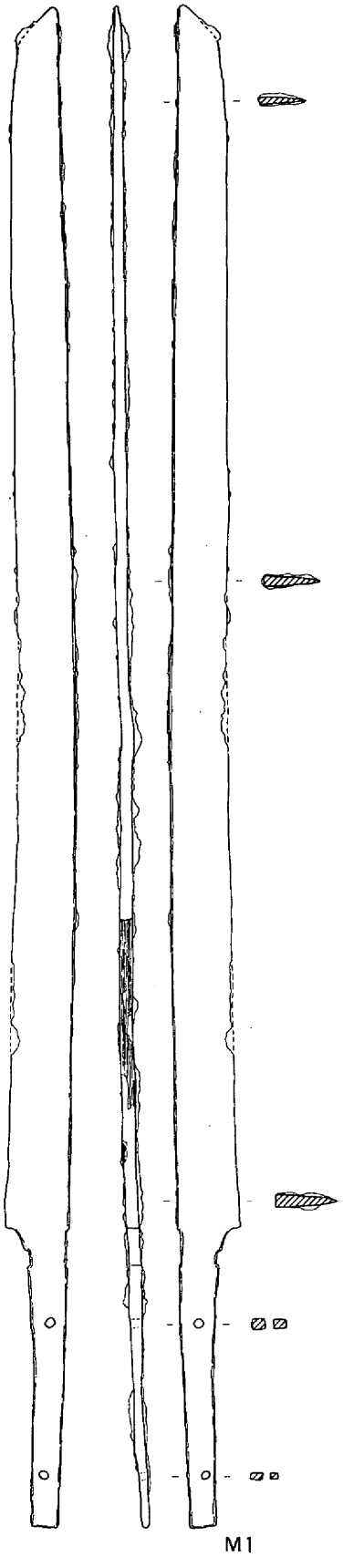
第12図　１号墳石室実測図および遺物出土状況（1/40）

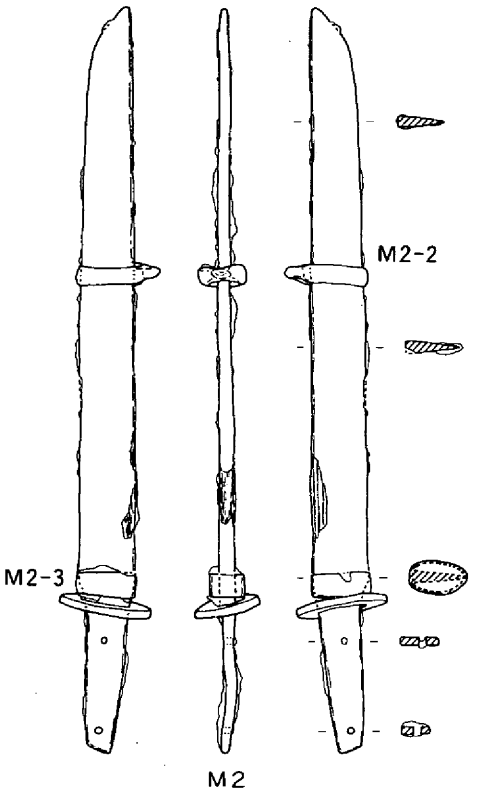


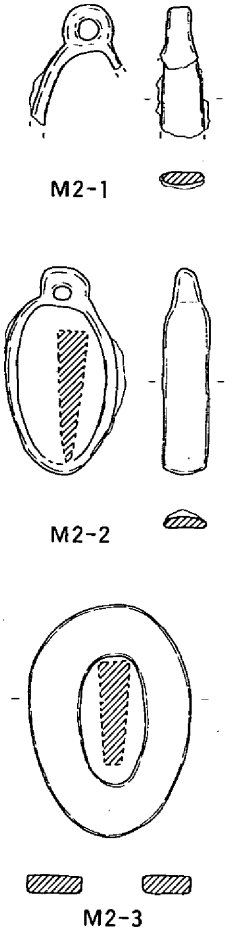
第13図　１号墳出土須恵器（1/4）

結果を得た。また、石室内の埋土はすべて水洗を行い、その結果、装身具や歯が検出された。

一方、石室前庭部付近でも須恵器などが出土した（第11図）。これらの遺物は閉塞石の外側に存在し、ほとんどが完形の状態で検出されたことから、石室前庭部における葬送儀礼の際に用いられたものと推測される。各々の須恵器の年代幅が大きいことから、これらの須恵器は複数回におよぶ葬送儀礼を経て残されたものと考えられる。また、閉塞石の外側付近から碧玉製管玉片（Ｊ11）が出土した。この管玉は追葬時の掻き出し時に、石室外部に出されたものと推定できる。



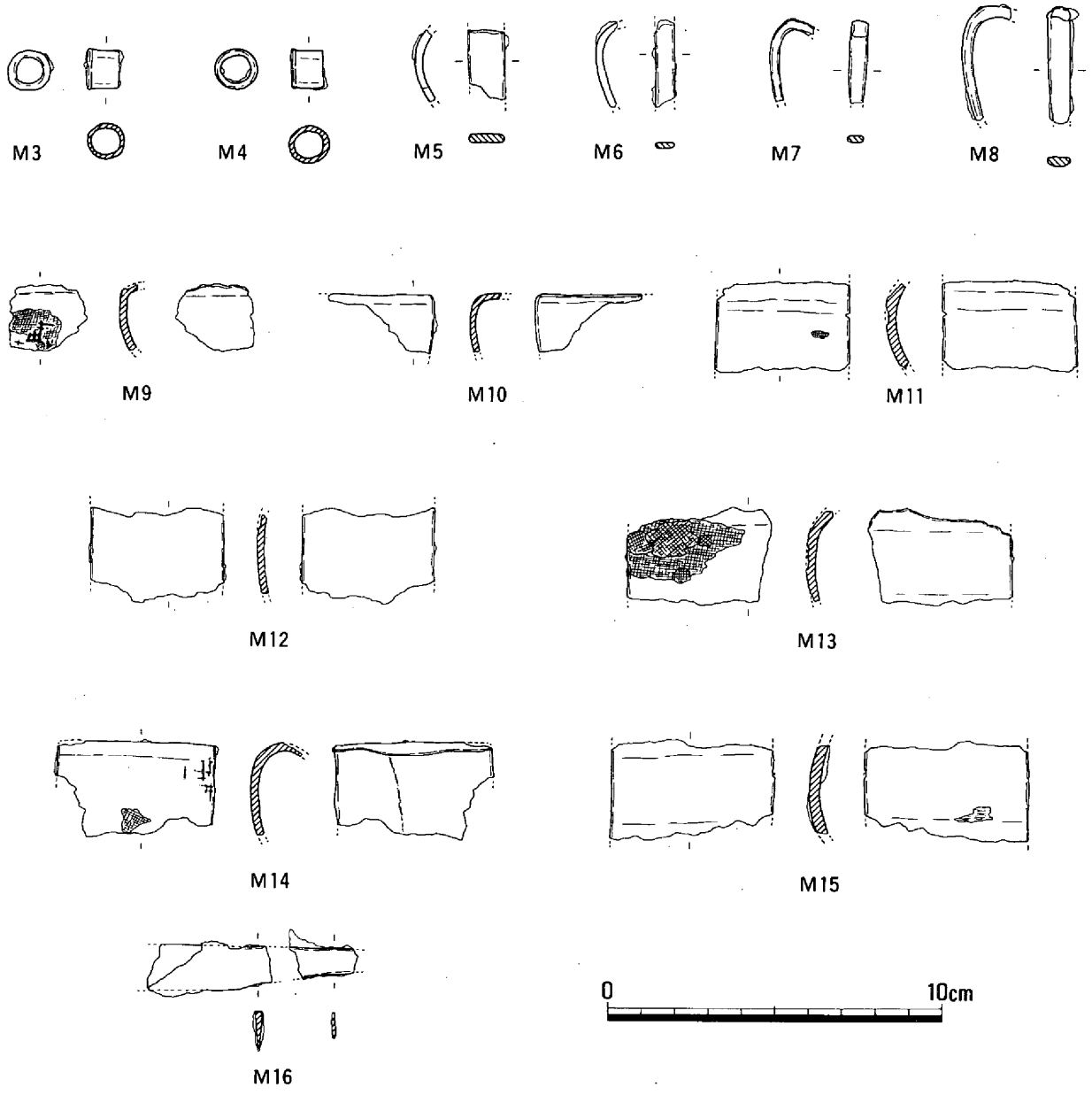




第14図　１号墳出土鉄器（１）（1/5・1/2）

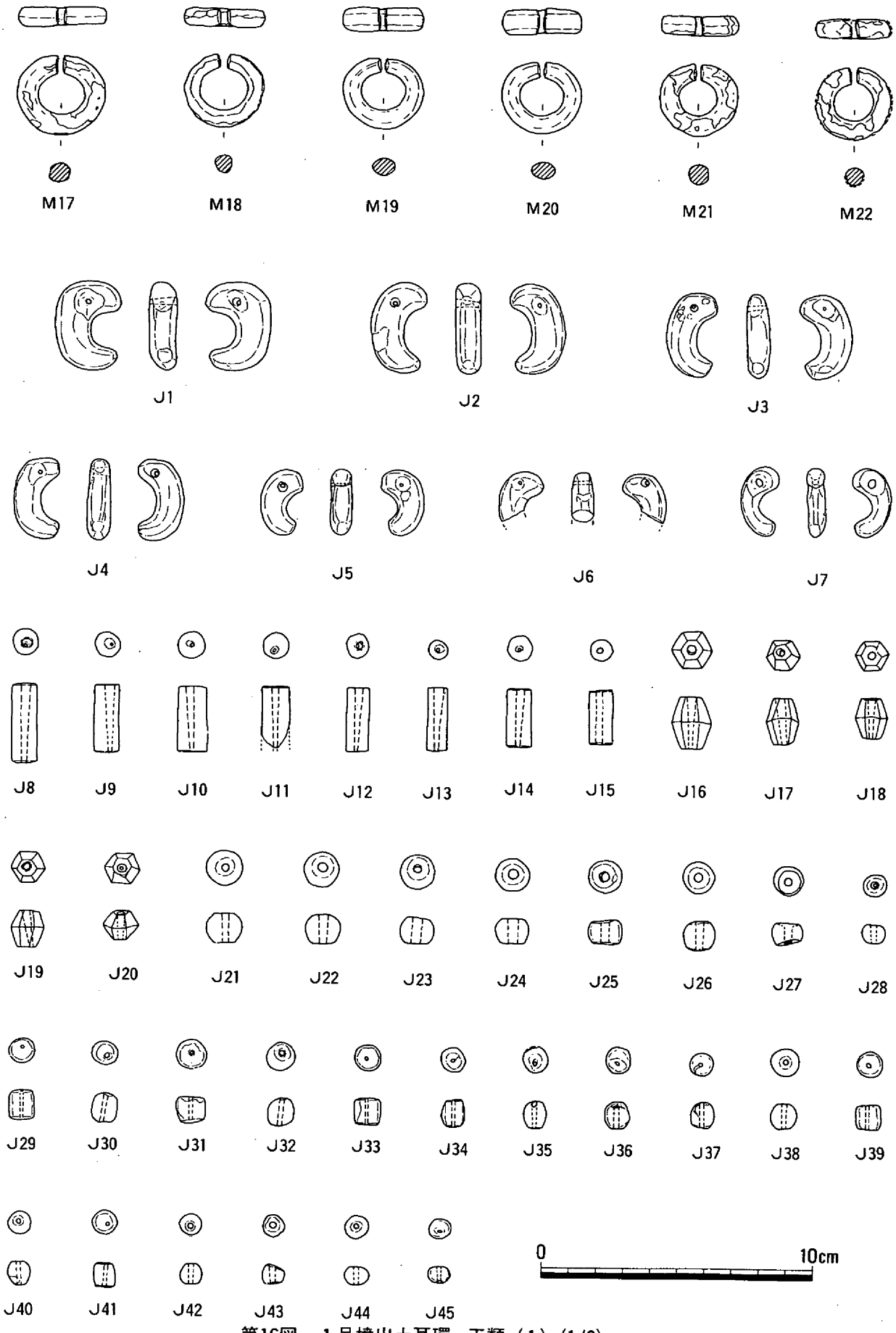
１号墳出土遺物

須恵器（第13図）　いずれも石室内および前庭部付近で出土した須恵器である。１は杯蓋である。２～７は杯身である。１・２は前庭部より出土した。３は石室前庭部の閉塞石の下から検出された。３～５はいずれもヘラ切り後の調整が雑で、３は杯底部に粘土塊の隆起がみられる。４・５はヘラ切り後、杯底部に工具による調整痕がみられる。６は立ち上がりのないタイプの杯身であり、石室内の玄門付近で出土した。７は高台がつく杯身であり、６とは反対側の玄門付近で出土した。８は小形壺であり、前庭部より出土した。９～10は平瓶であり、いずれも前庭部より出土した。９の体部には穿孔がみられる。10は体部にカキメが施され、肩部に円形粘土粒をもつ。11～14は長頸壺である。いずれも高台をもつ。12・13は石室内玄門付近で出土したが、11・14は前庭部付近で出土した。

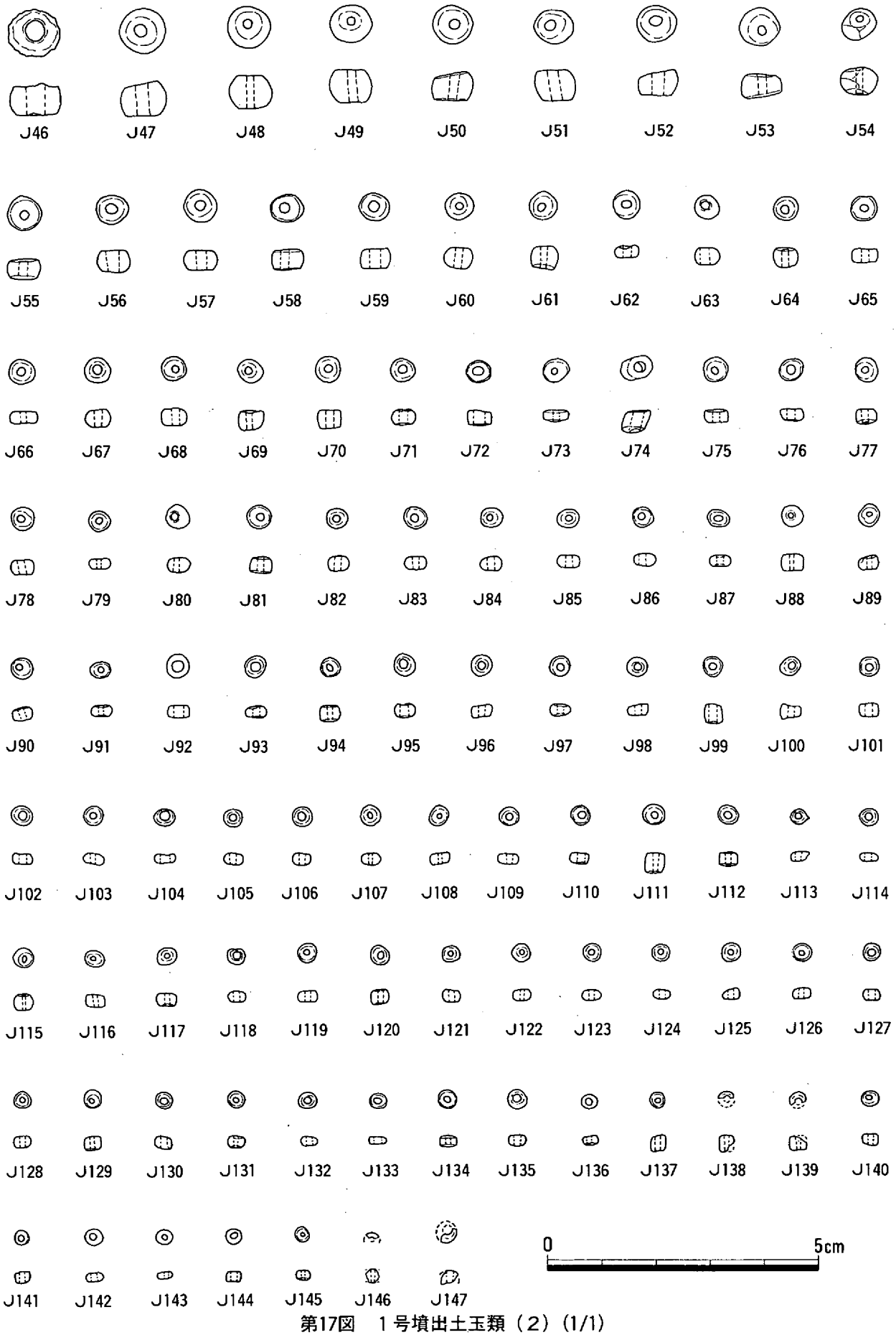


第15図　１号墳出土鉄器（２）（1/2）

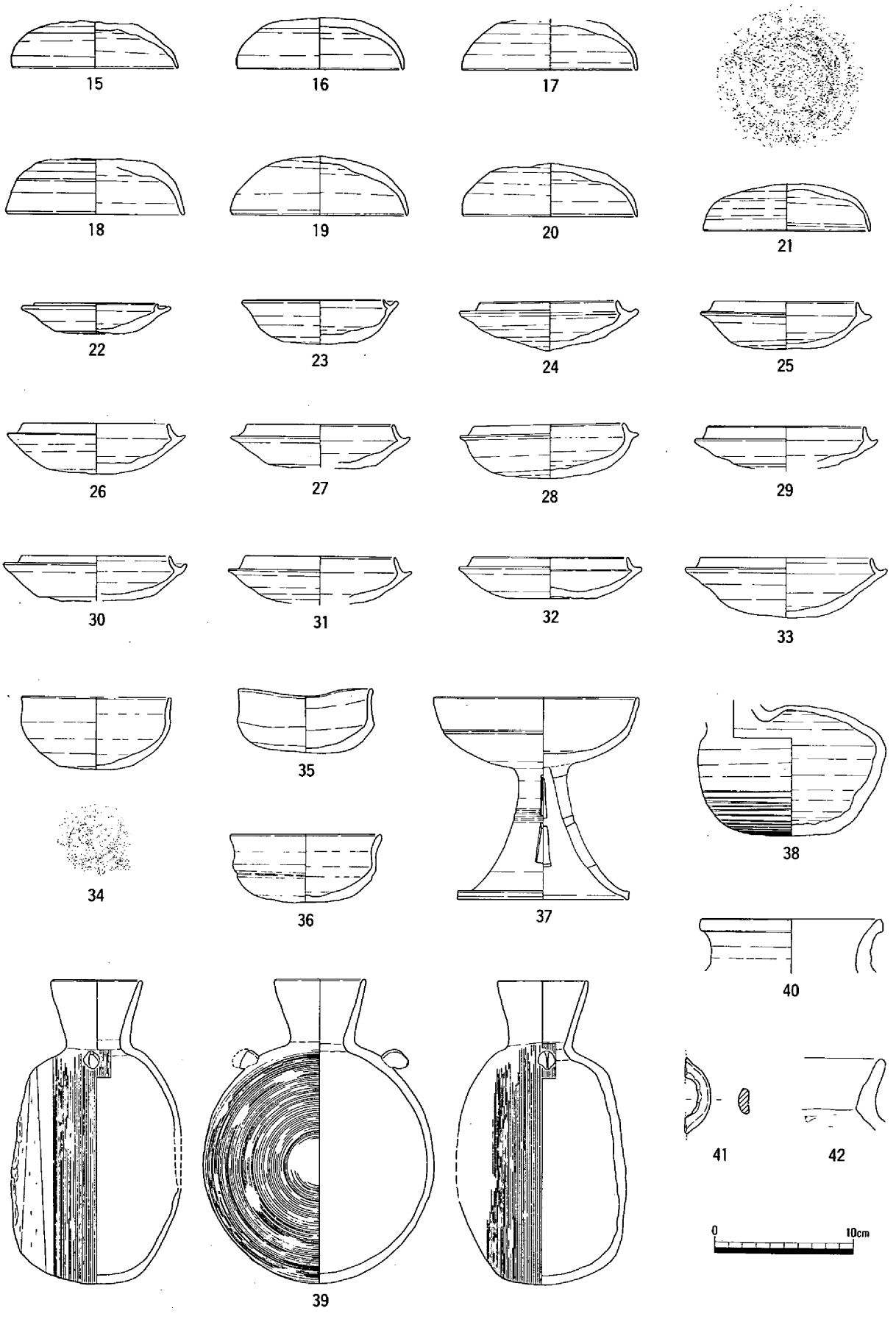
鉄器（第14図・第15図）　第14図は石室内より出土した刀である。Ｍ１は大刀である。全長110.8cmを測る。棟の付近で木質痕がみられ、鞘におさめて副葬されたと考えられる。茎には目釘孔が２カ所みられ、茎元抉がみられる。Ｍ２は刀であり、全長49.6cmを測る。刀は足金具（Ｍ２－１、Ｍ２－２）や鍔（Ｍ２－３）とともに出土した。刀身には一部木質痕がみられ、Ｍ１と同様に鞘におさめられて副葬されたと考えられる。Ｍ２－１およびＭ２－２は足金具である。Ｍ２－１は破片の状態で刀に銹着していた。また、Ｍ２－２は刀に装着された状態で出土した。Ｍ２－３は鍔である。倒卵形で透かしはない。また、象眼などの装飾は確認されなかった。Ｍ３・Ｍ４は懸通孔金具である。いずれも一方を玉縁状に加工しており、径1.2cm前後を測る。これらの金具は装飾大刀に付随して出土する例が多いが、水別１号墳では装飾された大刀の部品は検出されなかった。このように装飾大刀以外の大刀に付属して懸通孔金具が出土した例として県内では新見市横見１号墳（岡田他1977）などがある。Ｍ５～Ｍ８は責金具である。Ｍ９～Ｍ15は鞘金具である。Ｍ11とＭ12、Ｍ14とＭ15は幅が同じであることから同



第16図　１号墳出土耳環・玉類（１）（1/2）



第17図　１号墳出土玉類（２）（1/1）



第18図　１号墳墳丘および周辺部出土土器（1/4）

一個体であると考えられ、少なくとも３点以上の鞘金具があったと考えられる。金具の外面には布が付着しているものがある。布には目の粗いものと細かいものが存在する。Ｍ９には目の細かい布の上に粗い布が付着している。M13では目の細かい布が幾重にも重なっている。M14では両者が付着している。このことから、これらの鞘金具を装着した刀は布に覆われて副葬されたと考えられる。このように、横穴式石室から出土した大刀の金具に布が付着していた例として県内では大原町川戸２号墳（宇垣1995）があげられる。M15の内面には木質が遺存している。M16は刀子である。破片であり、遺存状況は良くない。

装身具（第16図・第17図）　M17～M22は耳環である。いずれも石室内より出土したが、確実に対になって出土したものはない。M17は錆が激しく詳細は不明であるが、鉄地銀張と考えられる。M18は鉄地金銅張である。M19は銅芯に金箔を覆ったもので、端部では金箔を折り込んでいる状況が観察できる。M20は銅芯金張と考えられる。M21・M22はともに鉄地金銅張と考えられ、部分的に金箔が残っている。Ｊ１～Ｊ７は勾玉である。Ｊ１～Ｊ６は瑪瑙製である。穿孔はあらかじめ勾玉の頭部を大きくえぐった後に施されている。Ｊ７は滑石製である。Ｊ８～Ｊ15は碧玉製管玉であり、いずれも片面穿孔である。Ｊ11のみ石室前庭部で出土し、その他は石室内で出土した。Ｊ16～Ｊ20は水晶製切子玉である。いずれも六面を加工してある。Ｊ21～Ｊ27は滑石製丸玉である。Ｊ28は水晶製丸玉である。Ｊ29～Ｊ45は土玉である。いずれも全体に黒褐色を呈している。Ｊ46は鉛ガラス製のガラス玉であり、表面が白濁している。類例として県内では久世町木谷８号墳（福田1995）がある。Ｊ47～Ｊ147はガラス玉である。大きさは径2.3～10㎜までの範囲におさまり、色調は、濃い青、水色、黄緑がある。

１号墳墳丘および周辺部出土遺物

須恵器（第18図）　第18図は１号墳墳丘および周辺部から出土した土器である。これらの土器の大半は１号墳に伴うものと考えられるが、なかには近接する古墳の土器も含まれている可能性がある。15～21は須恵器杯蓋である。15～18は天井部周辺に弱いヘラケズリが施されており、天井部中央はヘラ切り未調整あるいはナデによる調整を残す。21の天井部にはヘラ記号がある。22～33は須恵器杯身である。22は径が8.7㎝と小さく、杯蓋の可能性もある。23～33の杯底部は、そのほとんどがヘラ切り未調整か、あるいはヘラ切り後ナデにより調整されている。ヘラケズリが施されているものもあるが、その範囲は限られている。34～36は須恵器杯身と考えられる。34は底部にヘラ記号をもつ。焼成は良くない。35は歪んでいる。36は沈線状の段がみられる。焼成は良くない。37は高杯である。破片の一部が石室内で出土しており、石室内に副葬されたものが、石室外に掻き出されたものと思われる。長脚２段で２方向に透かしをもつ。38は平瓶である。39は提瓶である。体部の片面はカキメにより、もう一方はヘラケズリののちナデや指オサエにより調整されている。肩部にはカギ状の把手がつく。40は甕あるいは横瓶の口縁と推測される。41は把手である。

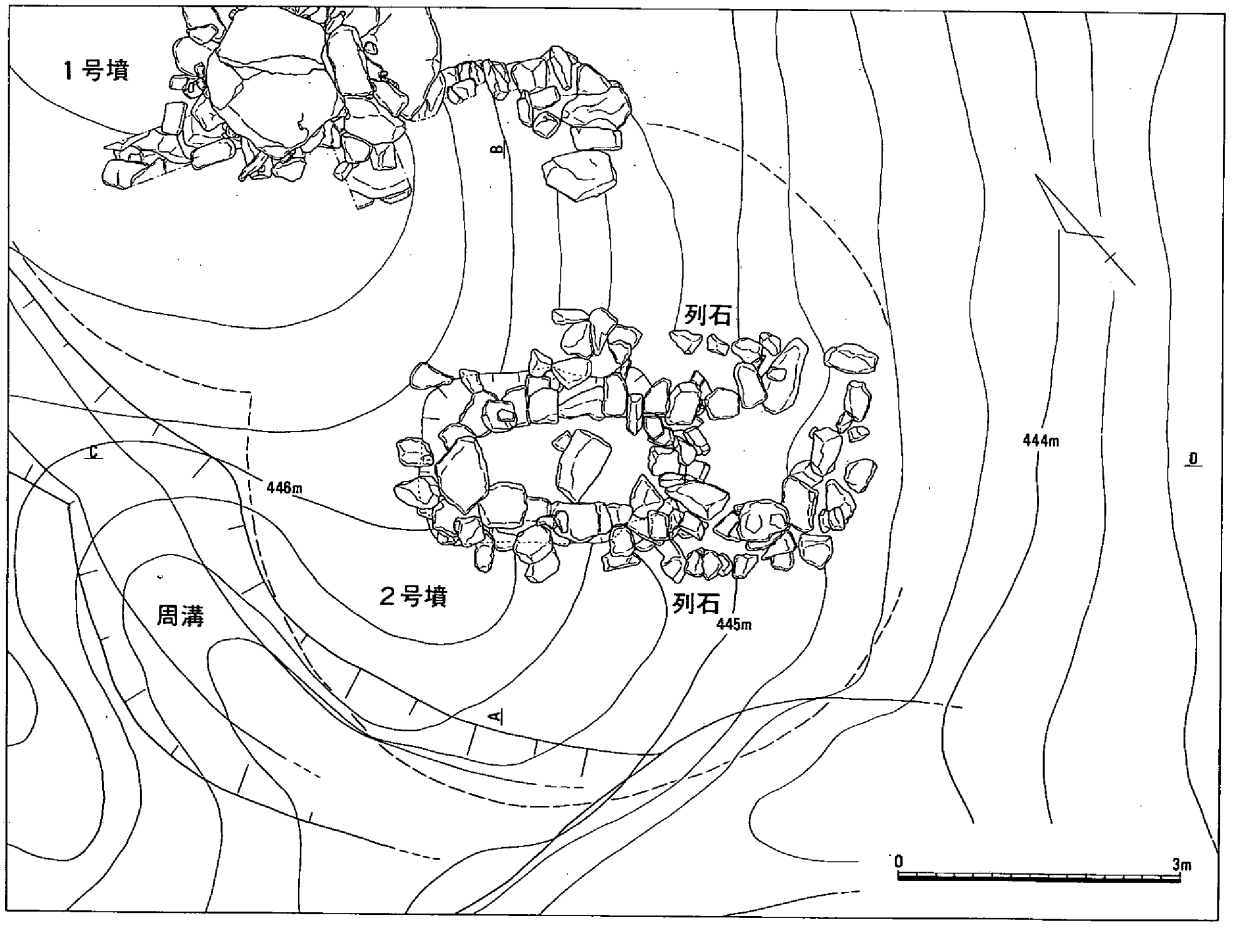
土師器（第18図）　42は土師器甕の口縁部である。

３．２号墳

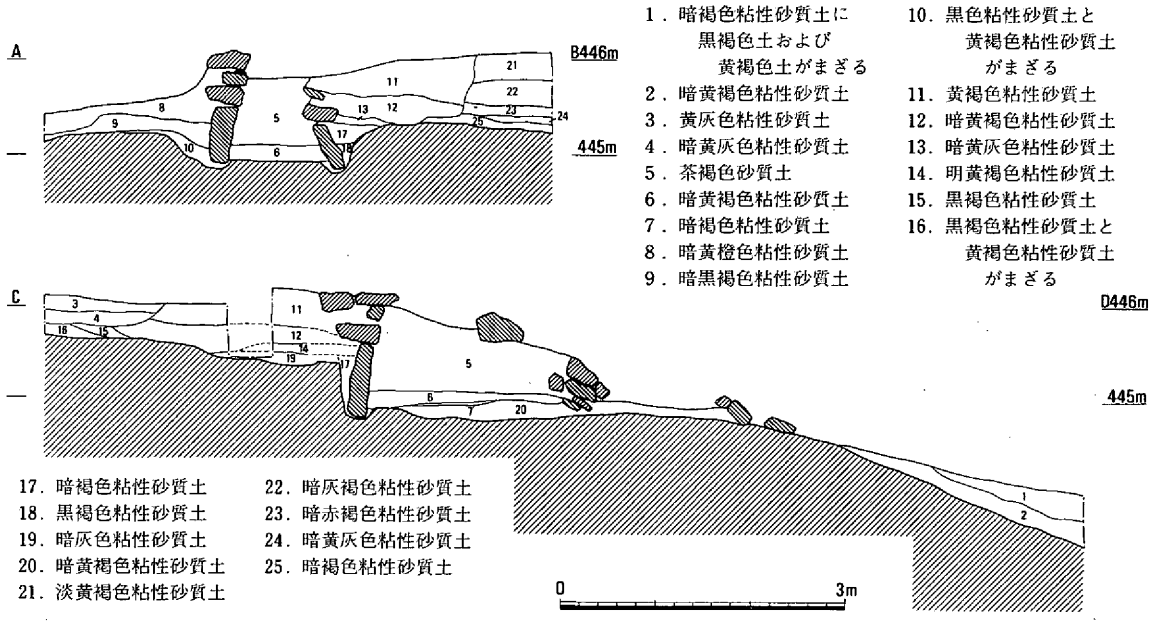
墳丘と周溝（第19図・第20図）

２号墳は調査区の中央付近に位置する古墳である。調査前の段階では２号墳の存在は確認できなかったが、調査中に石室の天井石が発見されたことから、古墳の存在が明らかになった。２号墳の背後には周溝がめぐっており、この周溝の状況および横穴式石室の位置などから、２号墳は径７ｍの円墳であったと考えられる。墳丘には黒褐色土（黒ボク）と黄褐色土が混ざったような土を利用していたが、２号墳の盛土では版築のような土層断面は観察できなかった。盛土は１号墳と同様に、墳丘背後の周溝を掘削した時に生じた土を利用したものと考えられる。しかし、１号墳の盛土が黒褐色土を中心とするものであったのに対し、２号墳ではやや黄褐色土が多く含まれている。これは古墳群の背後の尾根から土を採取するのに、表層に近い黒ボクを中心とする土が先につくられた１号墳に利用され、やや下層に存在する黄褐色を中心とする土が後に築造された２号墳に利用されたためと推測される。また、２号墳は１号墳の墳丘盛土を切っていることが確認できたことから、２号墳は１号墳築造の後に隣接して築造されたと考えられる。さらに、２号墳の墳丘盛土は南に位置する３号墳の周溝に一部切られているようであった。

周溝は２号墳の背後を弧状にめぐっており、幅約1.8m、深さ約0.4mを測る。周溝は１号墳と２号墳の間では検出されなかったことから、２号墳の西側から南側にかけてのみ存在したと考えられる。



第19図　２号墳調査後墳丘測量図（1/80）



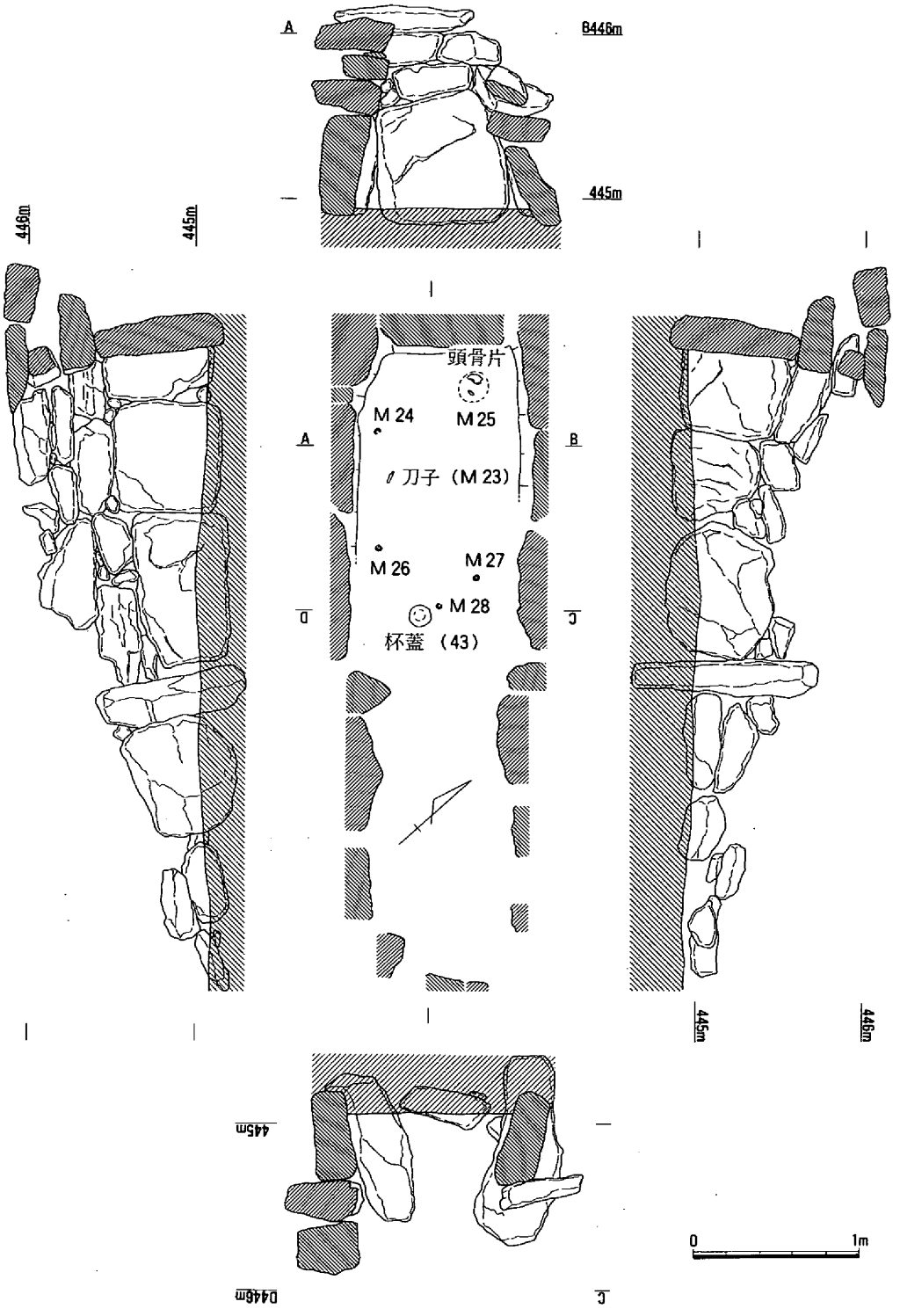
第20図　２号墳墳丘断面図（1/80）

墳丘内列石（第19図）

２号墳では、検出された石室の側壁と平行するように20～30cmほどの石が直線状に並べられていた。これらの石は１号墳の外護列石のように何段も積み上げられたものではなく、単に並べただけのような置き方をしていた。これらの石列の出土位置や高さを検討した結果、石列は横穴式石室構築時に設置され、古墳が完成した時には盛土の中に埋没してしまったと推測される。このように墳丘内に石列を設けた類例として県内では勝央町畑ノ平２号墳（弘田他1996）、勝央町工業団地10号墳（山磨1976）や新見市横見１号墳（岡田他1977）があげられる。これらの古墳では墳丘盛土の流出を防ぎ、墳丘の形状を保っておくためにこのような列石を配置した可能性がある。また、列石を水別２号墳と同様に石室の周辺に設けた例として、加茂町室尾石生谷口古墳（小林1998）がある。これらの列石は横穴式石室の構築過程の途中で設けられており、特に石室周辺の土砂の流出を防ぐ目的があったものと考えられる。

横穴式石室（第21図）

２号墳の埋葬施設は両袖式の横穴式石室であり、全長約390cmを測る。主軸はN－48°－Wである。石室は尾根の東斜面上を整地した後に築造されている。石材は、石を据え付ける箇所の周辺を若干掘り下げた後に設置されたものと考えられる。玄室の平面形は長方形で、全長210cm、幅108cm、高さ106cmを測る。天井石は奥壁に近いもののみが残存しており、長さ80cmほどの平らな板石であった。また、天井石のうち一石は石室内に転落していた。奥壁では最下段に平らな石を腰石として立てかけていた。腰石の上からは小さめの石材を２段ほど小口積みしている。側壁も同様の構造をしており、最下段に平たい石材を内傾気味に立てかけ、その上からやや小ぶりな石を積み上げている。玄門部には袖石が設けられている。袖石は高さ96～114cmほどの細長い石で、やや内傾気味に立てかけられている。玄門幅は約70cmを測る。框石はない。前庭部には30～50cmほどの石を配置している。前庭部では現状では石が２段ほど積み上げられているが、後世の改変を受けている箇所もあり、最終的に何段ほ



第21図　２号墳石室実測図および遺物出土状況（1/40）

ど積み上げられていたかは不明である。

石室の玄門部では閉塞石が検出されており、30cmほどの塊石が積み上げられていた。この付近からの遺物の出土は少なかった。

遺物出土状況（第21図）

２号墳では横穴式石室の天井石等が失われていたものの、遺物は石室内および周辺部から数多く出土した。石室床面は耳環の分布状況などから、必ずしも埋葬当時の状況をそのまま残しているとはいえないが、比較的良好な状態で遺存していた。２号墳床面からは須恵器・鉄器・耳環・玉類が出土した。須恵器は杯蓋が１点、鉄器は刀子が１点出土した。また、耳環は５点（M24～28）出土した。さらに、石室の奥壁左隅付近で頭骨の一部と歯を検出した。歯については鑑定を行い、40～50歳ごろの女性と推測できる。この頭骨付近からは耳環（M25）およびガラス玉が検出された。これらの遺物は、副葬時に人体に着装されていたものと判断できる。また、石室内の埋土を水洗したところ、耳環（M29）・玉類および歯が検出された。

また、２号墳の墳丘およびその周辺からも多くの須恵器・土師器を検出した。

２号墳出土遺物

須恵器（第22図）　43・44は須恵器杯蓋である。43は石室内床面から検出され、口縁部を下にして置かれていた。口径12.8cmで、天井部にはヘラケズリが施されている。44は石室埋土中などから破片の状態で出土した。

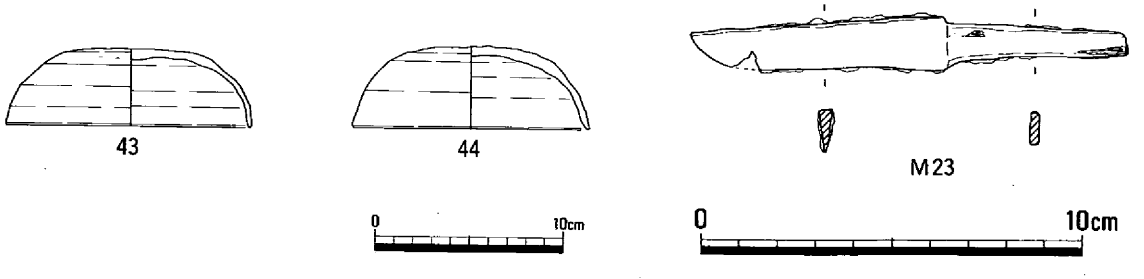
鉄器（第22図）　M23は刀子である。石室床面より検出された。全長11.5cmを測り、茎には木質が残っている。

装身具（第23図）　M24～M28は耳環である。耳環は計６点検出され、少なくとも３体の埋葬が推測できる。耳環は散乱した状態で出土しており、確実に対になるものは不明である。M24は鉄地金銅張と考えられるが緑青に覆われており、詳細は不明である。M24の表面には繊維状のものが付着している。M25は銅芯銀張である。M25は頭骨片に伴い石室奥壁左隅部付近で出土したものである。M26・M27・M28は鉄地金銅張である。M29は銀環である。歪んでおり、石室埋土の水洗により検出した。

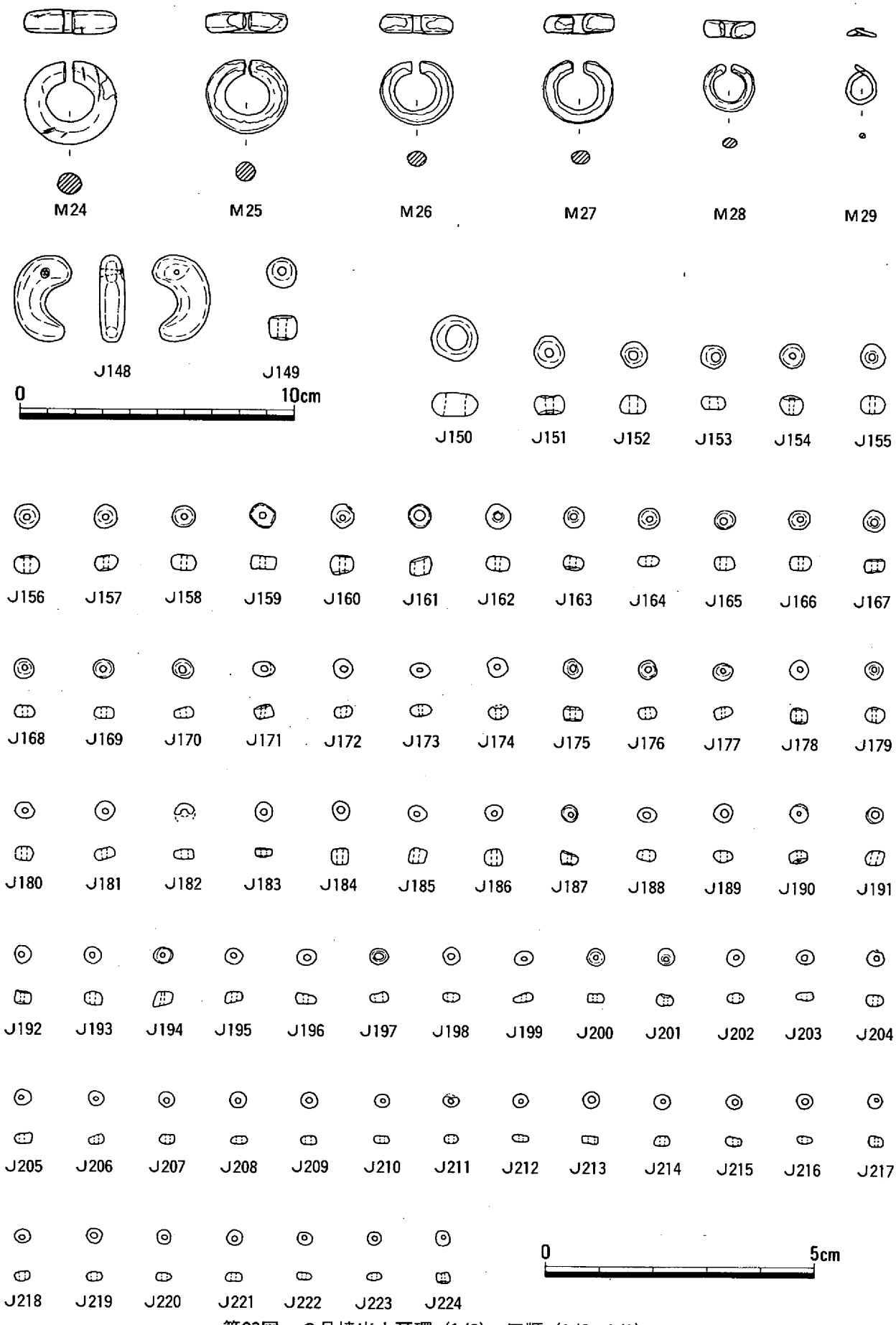
J148は勾玉であり、瑪瑙製である。J149は滑石製玉である。いずれも石室内埋土の水洗により検出された。J150～J224はガラス玉である。ガラス玉はすべて石室内で出土し、特に石室の奥壁左隅部の頭骨片付近で集中して出土した。ガラス玉の大きさは径2.5～8.5mmの範囲で、濃い青、水色や黄緑のものが存在する。

２号墳墳丘および周辺部出土土器

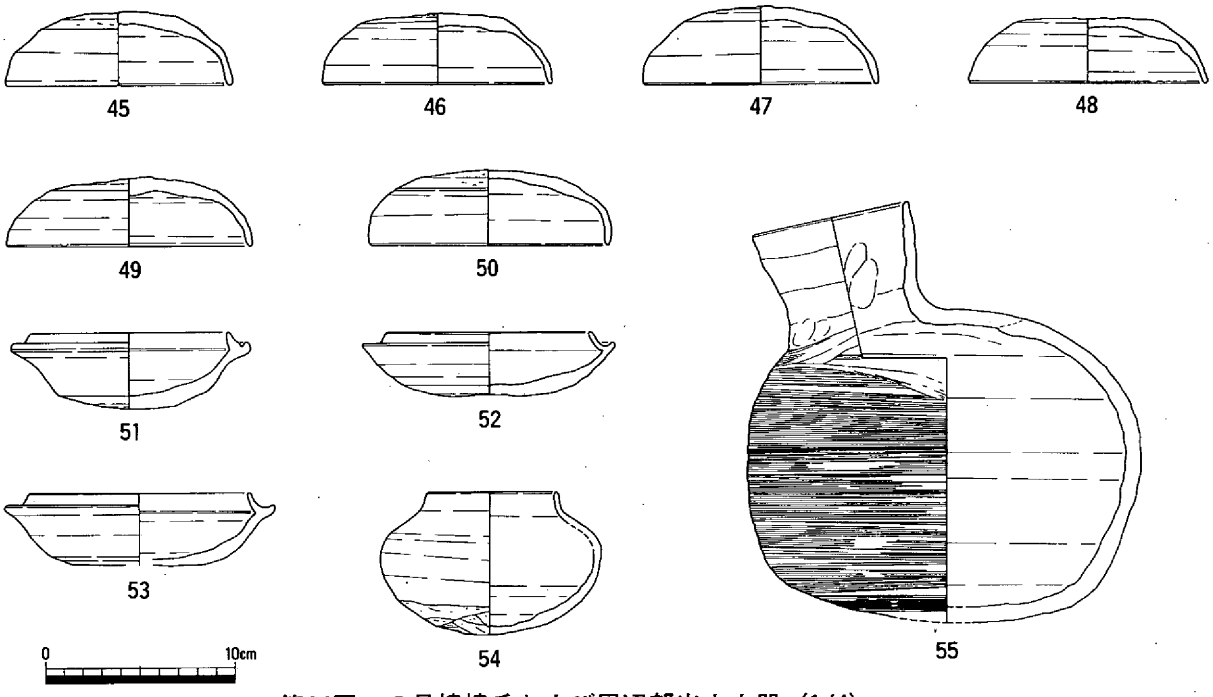
第24図は２号墳墳丘および２号墳周辺から出土した須恵器である。これらの須恵器のうち、いくつかは２号墳に伴うものである可能性があるが、すべてが２号墳に伴うものであるとはいえず、隣接する１号墳および他の古墳から流れ込んだものも含まれている可能性があることを付け加えておく。



第22図　２号墳出土須恵器（1/4）・鉄器（1/2）



第23図　２号墳出土耳環（1/2）・玉類（1/2・1/1）



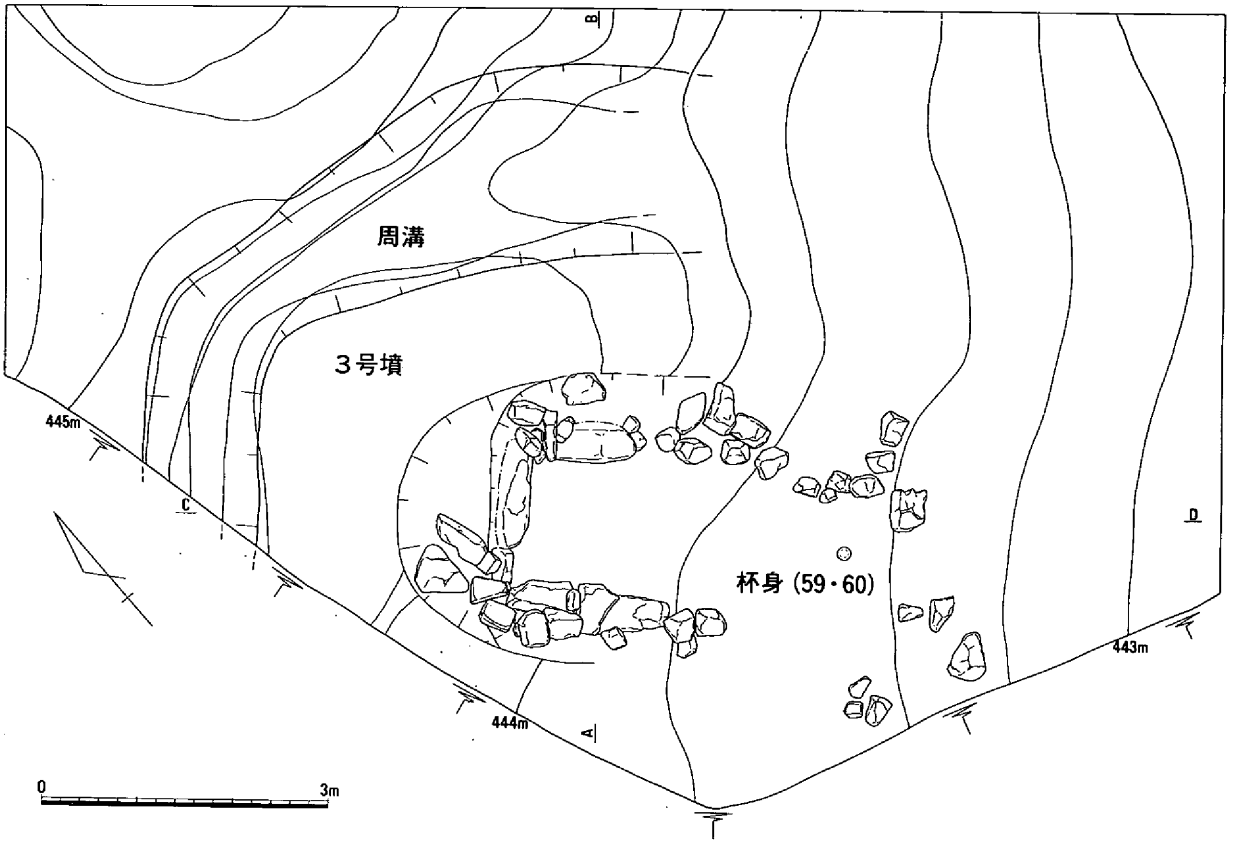
第24図　２号墳墳丘および周辺部出土土器（1/4）

須恵器（第24図）　45～50は杯蓋である。49・50は天井部にヘラケズリを施しているが、その他は天井部の周辺部にのみヘラケズリあるいはナデによる調整が行われている。51～53は杯身である。口径は10.4～11.6cmである。54は短頸壺である。口径6.8cm、器高7.6cmを測る。底部にヘラケズリが施され、工具による調整がみられる。55は平瓶である。第１次調査（確認調査）時のＴ－２で出土しており、ちょうど２号墳後方の周溝内に相当する位置に存在していたものと考えられる。外面にはカキメが施されている。円形粘土粒はない。

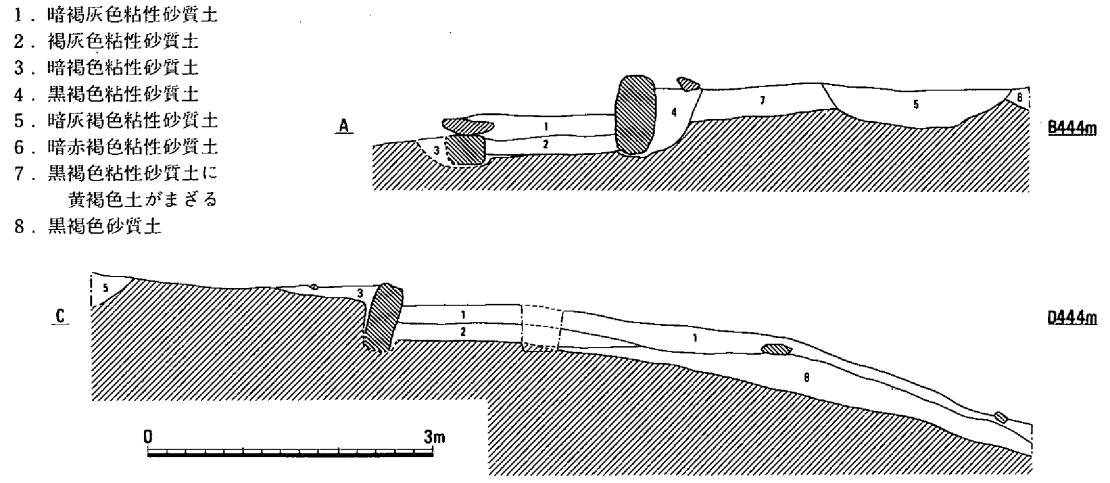
４．３号墳

墳丘と周溝（第25図・第26図）

３号墳は調査区の南端に位置し、北からのびる尾根の先端付近に位置する。墳丘の大部分は隣接する道路により削平されていた。また、墳丘の盛土自体もその大半が失われており、調査前から付近には古墳に使用されたと考えられる石材が散乱していた。調査が進むにつれて横穴式石室および周溝が検出された。周溝は３号墳の北部で確認され、ちょうど横穴式石室を囲むようにＬ字状に折れ曲がっ



第25図　３号墳調査後墳丘測量図（1/80）



第26図　３号墳墳丘断面図（1/80）

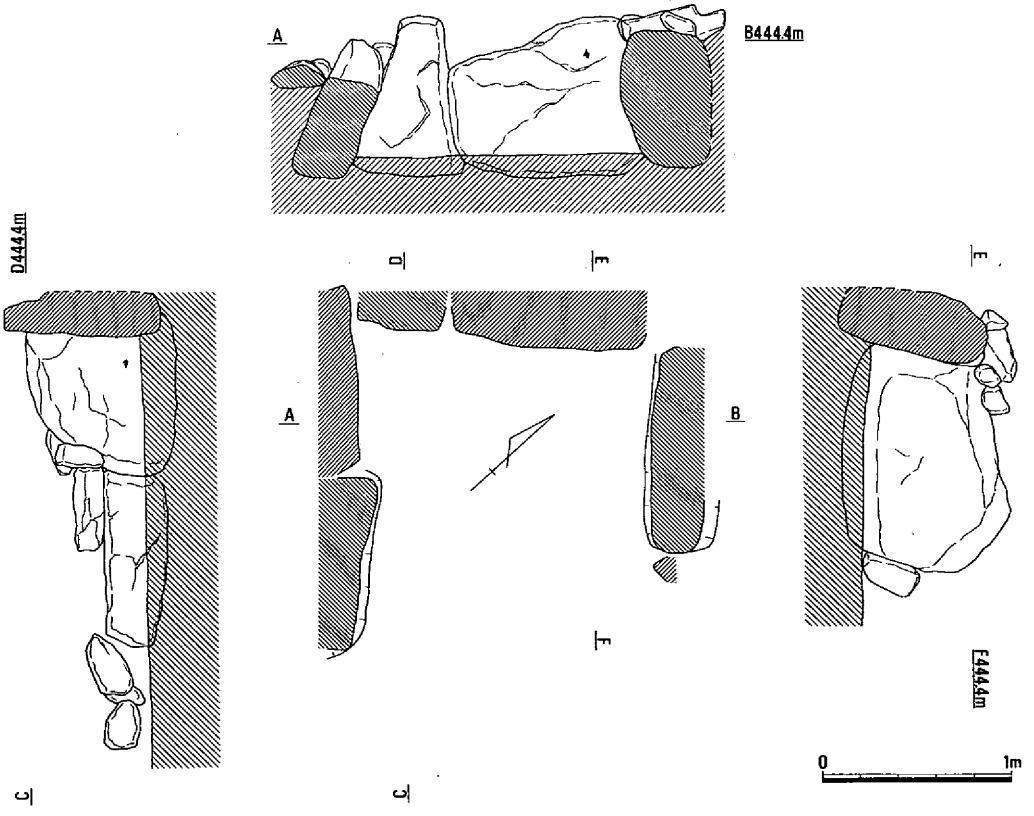
ていた。周溝は良好に残存している部分で幅約２ｍ、深さ約0.4ｍを測る。この周溝の検出状況から、３号墳は一辺約６～７ｍの方墳であったと考えられる。また、周溝は北に位置する２号墳の墳丘盛土を切って造られたようであり、３号墳は２号墳よりも後に造られた古墳である可能性が高い。

横穴式石室（第27図）

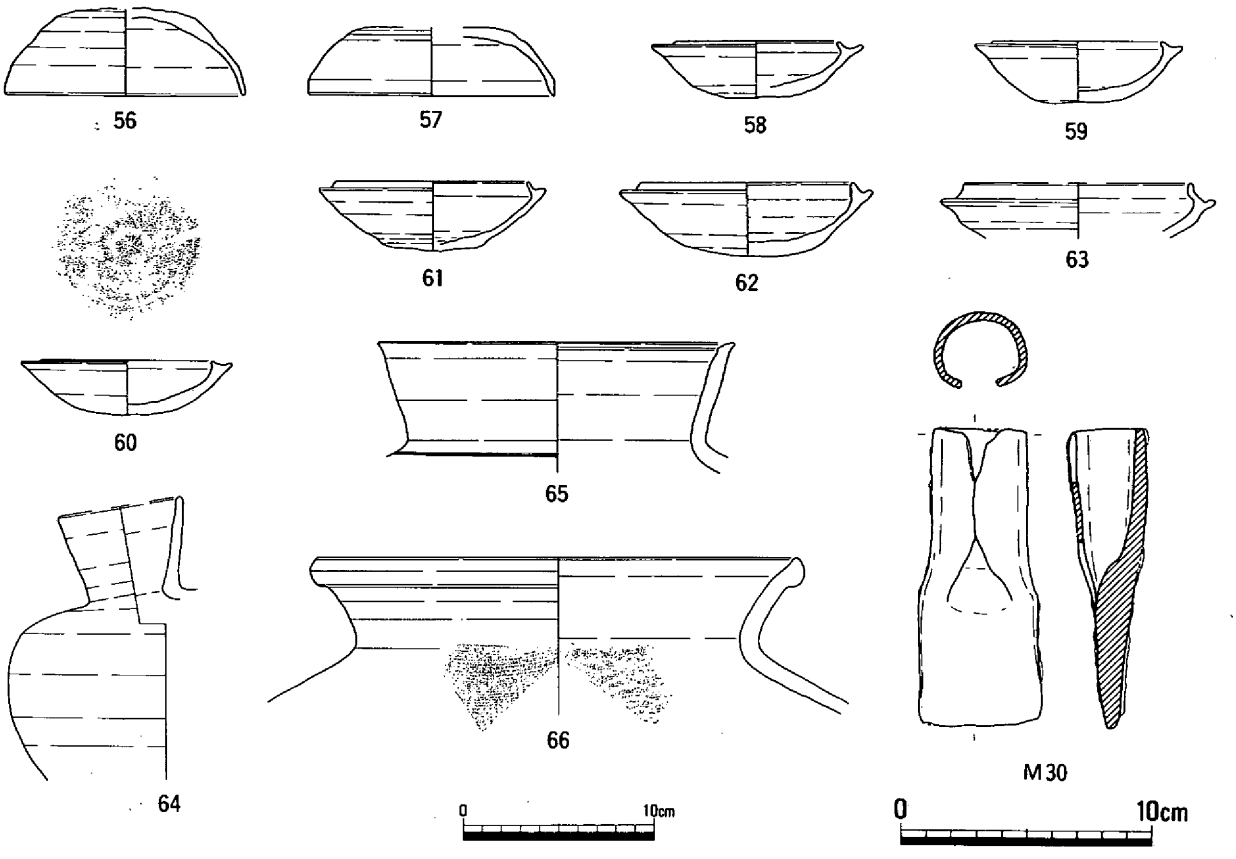
横穴式石室は大部分が破壊されており、奥壁付近の石材がコの字状に残存しているのみであった。奥壁の基底部は２石で構成され、幅約100cm、高さ83cmほどの大きな石の横に幅60cmほどの石が縦に置いてあった。奥壁の幅は154cmを測る。また、側壁では基底部付近の石材（腰石）が残存していた。基底石には長さ90～110cmほどの比較的大きな石を使用していた。また、基底石の上には小ぶりな石が残存していたことから、３号墳の側壁は１号墳と同様に腰石の上に小さな石を小口積みにした構造をしていたものと推測できる。石室の全長は不明であるが、現在残っている部分で全長175cmを測る。奥壁の幅などから石室の平面形を推測すれば、３号墳は１号墳に類似した方形プランの石室であったと考えられる。石室の主軸はＮ－48°－Ｗで、南東方向に開口していたものと考えられる。

遺物出土状況

３号墳は大部分が破壊されていたため、３号墳に直接伴う遺物の出土はなかった。また、石室内の床面においても遺物の出土はなかった。一方、石室前庭部に相当する位置で、須恵器杯身が２点（59・60）検出された。この杯身は伏せた状態で重なって出土したことから、これについては埋葬当時の位置を保っている可能性が考えられた。その他の遺物は主に３号墳の周辺、特に墳丘の東側斜面で検出された。



第27図　３号墳石室実測図（1/40）



第28図　３号墳墳丘および周辺部出土土器（1/4）・鉄器（1/3）

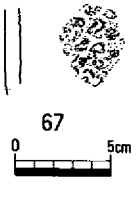
出土遺物

第28図に示した遺物は３号墳および３号墳周辺で出土したものである。したがって、すべての遺物が３号墳に伴うものであるとは言えず、２号墳あるいはその他の古墳に伴う遺物も含まれている可能性があることも付け加えておきたい。

須恵器（第28図）　56・57は杯蓋である。58～63は杯身である。59・60はともに石室の前庭部に相当する位置で出土した。60の内面底部には、ヘラによるような明瞭な線ではなく、ヘラミガキのようなやや不明瞭な線で「×」が付けられている。このように杯底部に記号をつける例は少ないが、類例として鳥取県東伯町塚本８号墳（大賀1987）がある。64は平瓶、65・66は甕の口縁部である。また、その他に須恵器高杯片および土師器甕の口縁部などが検出されている。

鉄製品（第28図）　M30は有袋鉄斧である。袋部内に木質痕はみられない。３号墳近くに設定された確認調査時のトレンチ（Ｔ－３）から出土した。３号墳に副葬されていたものと思われる。

５．その他



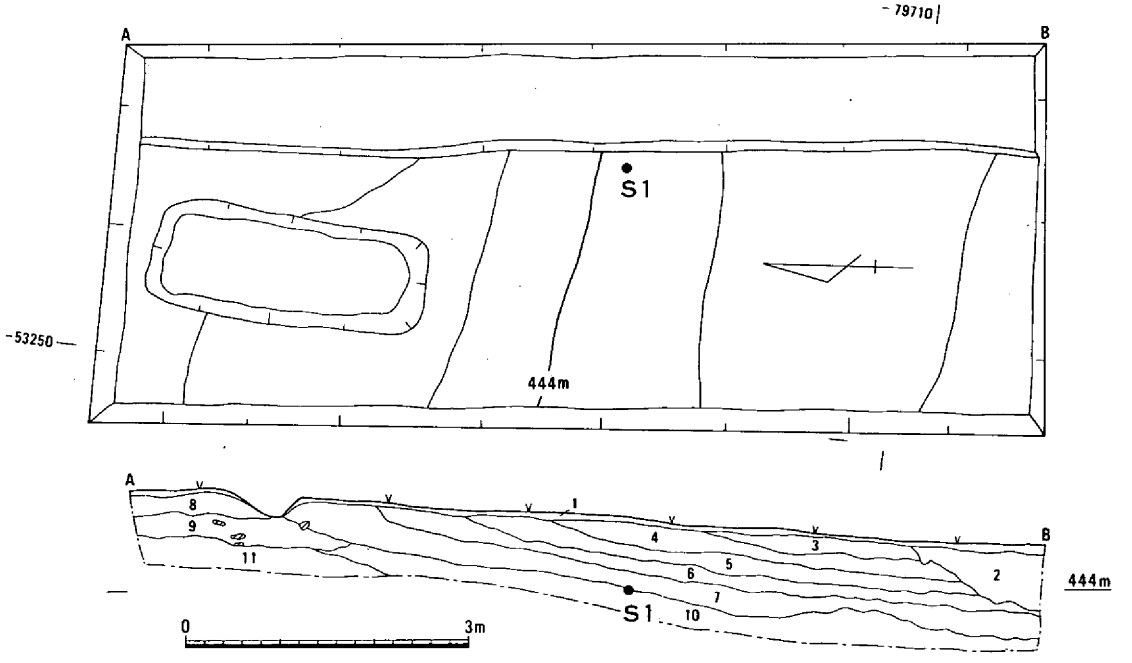
第29図　１区出土土器（1/4）

第１調査区では古墳３基の他に遺構は確認されていないが、調査区内からは古墳に伴わない遺物が発見されている（第29図）。67は縄文土器で、外面に押型文が施されている。

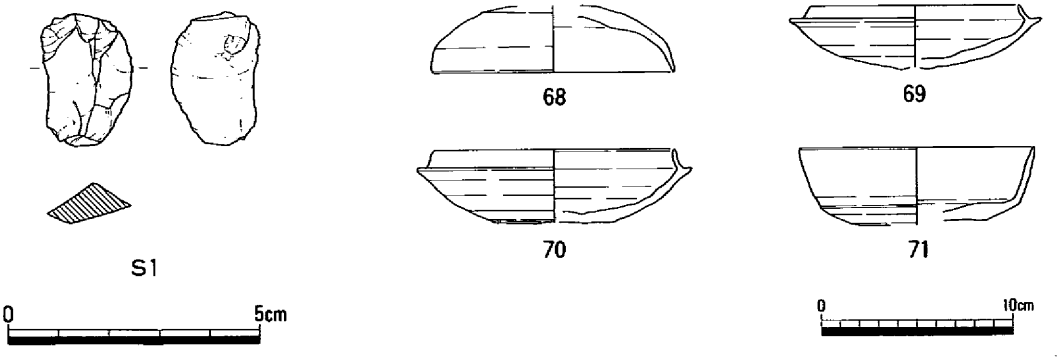
第２節　第２調査区

１．調査区の概要

第２調査区は第１調査区の東方約400mに位置する４×10mの長方形の調査区である（第30図）。調査区は第１調査区の存在する尾根の東隣の尾根の先端部に位置する。調査区周辺は牧草地として使用されていたこともあり、整地されて平地になっている。この近くには古墳（大栃古墳）がかつて存在しており、道路の建設により破壊されたと報告されている。調査区および周辺の表土からは須恵器片が検出され、この付近に古墳が存在していた可能性をうかがわせる。調査区内で土坑を検出した。土坑は長さ約2.9m、幅約1.2mほどの長方形を呈するものであるが、出土遺物はなく、時期や性格は不明である。また、調査区内での土層断面観察から姶良火山灰層などの火山灰層が斜面上に残存してい



第30図　第２調査区平面図および断面図（1/80）



第31図　第２調査区出土石器（2/3）・土器（1/4）

ることが確認され、層ごとに遺構および遺物の検出を行った。その結果、姶良火山灰層下より縦長剝片（Ｓ１）を１点検出した。

２．出土遺物

石器（第31図）　Ｓ１は縦長剝片であり、調査区中程の姶良火山灰層下より検出された。剝片は一部欠損しているが、重さは2.8ｇを測る。剝片は黒曜石製で同一方向からの加撃により形成されている。

須恵器（第31図）　68～71は須恵器である。いずれも破片での出土である。68は杯蓋、69～71は杯身である。71は受部をもたないタイプの杯身と考えられる。底部はヘラ切り未調整である。付近に存在していた古墳の副葬品であった可能性が考えられる。

参考文献

宇垣匡雅　1995　『川戸古墳群発掘調査報告書』大原町教育委員会

大賀靖浩　1987　『下斎尾１号墳・塚本８号墳発掘調査報告書』鳥取県東伯郡東伯町教育委員会

岡田博他　1977　「横見古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』９　岡山県教育委員会

小林利晴　1998　『室尾石生谷口古墳ほか』133　岡山県教育委員会

弘田和司他　1996　『西大沢古墳群・畑ノ平古墳群・虫尾遺跡・黒土中世墓・茂平古墓・茂平城』
地域振興整備公団　岡山県教育委員会

福田正継　1995　「木谷古墳群」『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』２
日本道路公団広島建設局津山工事事務所　岡山県教育委員会

山磨康平　1976　『勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』勝央町教育委員会

第4章　まとめ

今回の調査で、水別古墳群・水別遺跡では古墳などの遺構が検出された。第1調査区では古墳が3基検出された。1号墳と2号墳は比較的良好な状態で残存していたが、3号墳はその大部分が破壊されていた。また、第2調査区では姶良火山灰層が検出され、その下層から縦長剝片が1点出土した。以下、水別古墳群・水別遺跡のなかで良好な状態で検出された1号墳および2号墳を中心に若干の考察を行いたい。

(1)　墳丘と外護列石

水別1号墳と2号墳はともに円墳で、径7mと推定される。両古墳で特徴的なのは、1号墳では墳丘前面に外護列石が、2号墳では墳丘内に列石が構築されている点である。

1号墳では墳丘の東側に約4.5mにわたり外護列石が施されている。列石は石垣のように数段石を積み上げてつくられており、墳丘前面を弧状にめぐっている。このように外護列石を前面に施した例はいくつか存在するが、終末期古墳にみられる方墳に伴うような外護列石を除くと県内では勝央町畑ノ平6号墳（弘田他1996）や久米町コウデン2号墳（村上1980）や岡山市鳩ケ岩古墳（山磨1988）などがあげられる。

2号墳では墳丘内に列石が施されている。これらの列石は古墳が完成した時には盛土の中に埋没してしまって、表面には現れなかったと考えられる。このように列石を墳丘内に設けた理由として、墳丘盛土の流出を防ぐといった目的が考えられる。

(2)　横穴式石室

水別古墳群では3基の横穴式石室が検出された。1号墳では全長435cmの方形の玄室をもつ横穴式石室が、2号墳では全長390cmの長方形の玄室をもつ横穴式石室が検出された。このように水別古墳群では異なる2つのタイプの石室が発見された。

1号墳の横穴式石室は玄室比（玄室長／奥壁幅）1.07の方形のプランを呈し、基底部に大きな石を据えて腰石とし、その上から石を積み上げて持ち送っている。このような石室は近くでは鳥取県の西部の伯耆地方でみることができ、水別1号墳もこの地方からの影響を受けたものと推測される。伯耆地方でこのタイプの石室は九州地方の影響を受けて成立したとされ、代表例として倉吉市大宮古墳（名越他1978）や倉吉市家ノ後口1号墳（名越他1977）などがあげられる。大宮古墳は南北28m、東西23.4mの不整形を呈する円墳であり、玄室は全長2.6m、幅2.3mで、玄室比1.13の方形の横穴式石室をもつ。石室は腰石を据えつけ、その上部は板石を使用し、四方から持ち送っている。大宮古墳の築造時期は6世紀中葉と考えられる。この大宮古墳に後続する古墳として家ノ後口1号墳があげられる。家ノ後口1号墳は直径約15mの円墳であり、石室は全長約5m、玄室は全長2.3m、幅2mで玄室比1.15を測る。水別1号墳はこのような伯耆地方の石室の影響を受けて成立したと考えられる。この方形の玄室をもつ石室は県内ではあまり例をみないが、蒜山地方にはいくつか存在しているようである[1]。このように方形の玄室プランをもつ石室は伯耆地方、特に伯耆東部との交流の結果もたらされたものと考えられる。

一方、2号墳の玄室は、1号墳の石室と異なり、長方形の平面プラン（玄室比1.94）を呈するもの

である。２号墳の石室は袖石を有する点や、腰石を用いている点など、山陰地方でよく見られる構築技法が採用されている。山陰地方において、このタイプの石室の調査例が少ないこともあり、詳細な系譜は不明である。

このように水別１号墳と２号墳は同じ古墳群でありながら、異なったタイプの横穴式石室を採用している。３号墳の横穴式石室は破壊されており詳細は不明であるが、１号墳と同じように玄室が方形のプランをもつ横穴式石室の可能性が高い。このことから、水別古墳群ではこのタイプの横穴式石室が主流であったと考えられる。一方、２号墳の横穴式石室は１号墳より規模が小さいこと、また２号墳は１号墳の墳丘を削り、付け足されたように築造されていることから、２号墳の石室には１号墳の石室と比べややランクの下がる人物が埋葬されていたものと考えられる。蒜山地方で横穴式石室の調査例は少なく、また石室の平面プランが詳細にわかっているものも少ない。水別古墳群から西へ３km程に存在する四つ塚１号墳（近藤1992）はこの地域における初期の段階の横穴式石室を持つ。この四つ塚１号墳の横穴式石室は全長6.6mで、玄室は全長4.88m、幅1.9mの長方形のプランを有する。この四つ塚１号墳の横穴式石室は広義には畿内型石室と分類されるが、閉塞が扉石である点や框石を有する点など畿内型石室にはない特徴をもっている。今回調査を行った水別古墳群は四つ塚１号墳より後に築造された古墳群であり、また、山陰地方の影響を受けていることが判明した。このことから、この地域では四つ塚１号墳築造以後、山陰地方の墓制が採用されたと考えられるが、周辺の古墳の調査例も少ないことから結論は差し控えたい。

(3)　被葬者

水別１号墳および２号墳の横穴式石室には追葬により複数の人が埋葬されたと考えられる。古墳に埋葬された人数を推定するのは困難であるが、水別古墳群では石室から出土した耳環および歯から若干の手がかりを得ることができた。

１号墳では耳環が６点出土しており、３人以上の埋葬があったと考えられる。一方、石室内からは歯が出土しており、被葬者の性別、年齢の推定がある程度まで可能である。鑑定の結果、１号墳では男性３人（いずれも20歳代）、女性１人（20歳代前後）、幼児１人（８歳前後）の５人以上の埋葬が確認された。これより、１号墳には５人以上の被葬者が埋葬されていたと考えられる。

２号墳では耳環が６点出土し、３人以上の埋葬が想定できる。一方、２号墳から出土した歯の分析から男性（20～30歳ごろ）、女性（40～50歳ごろ）の２体以上の埋葬が考えられる。これより２号墳では３体以上の埋葬があったと推定できる。

しかし、歯については腐朽して残存していない可能性もあり、これ以上の人数が埋葬されていたこともあり得ることをつけくわえておきたい。

(4)　築造年代

水別古墳群の築造順序は、墳丘の切り合い関係により１号墳→２号墳→３号墳の順に築造されたことが判明している。この他に水別古墳群の築造時期を推定する資料として、古墳群から出土した須恵器がある。以下、これらの須恵器を中心に水別古墳群の築造時期および追葬時期を考えたい。なお、須恵器の編年については鳥取県の陰田編年（萩本他1984）を参考にする。

１号墳では石室内から須恵器が出土しているが、最終埋葬に伴うもので、陰田９式頃と推定される。また、１号墳墳丘およびその周辺部から出土した須恵器は必ずしも１号墳に伴うものではないが、須恵器から１号墳の利用状況を推測することは可能であると考える。これらの須恵器の調整技法

を観察すると、一部の蓋杯では天井部あるいは杯底部に若干のヘラケズリが観察できるが、ほとんどはヘラ切りあるいはナデによる調整である。したがって、これらの須恵器は蓋杯の調整がヘラケズリからナデに移行する陰田6式から7式に相当すると考えられる。一方、高杯や提瓶にはやや古い様相を呈するものが存在し、陰田5式に属する可能性がある。

2号墳では石室内から須恵器杯蓋が出土している。杯蓋は天井部全面にヘラケズリを施すものがあり、陰田5式から6式に相当すると考えられる。また、周辺部から出土した須恵器には陰田6式に属すると考えられるものも存在する。

3号墳は3基の古墳の中では最後に築造されたものであるが、破壊されており、確実に3号墳に伴う土器は少ない。3号墳の前庭部付近で出土した須恵器は器形および調整から陰田7（新）から8式に相当すると考えられる。

以上から、1号墳は6世紀後葉に築造され、その後、7世紀前半にかけて追葬が行われ、7世紀後葉から8世紀前半に最終埋葬が行われたと考えられる。また、2号墳は6世紀後半に築造され、その後、幾度かの追葬が行われたと推測できる。また、3号墳は7世紀中葉前後に築造されたものと考えられる。

注1）蒜山地方には八束村上長田狐塚古墳など、未調査ではあるが、方形のプランの石室（玄室比1.2前後）をもつ古墳がいくつか存在しているようである（近藤1992）。

参考文献

近藤義郎　1992　『蒜山原四つ塚古墳群』（改訂版）　岡山県八束村

山陰考古学研究会　1996　『山陰の横穴式石室―地域性と編年の再検討―』

名越　勉他　1977　『ごりょう塚古墳他発掘調査概報』倉吉市教育委員会

名越　勉他　1978　『大宮古墳発掘調査概報』倉吉市教育委員会

萩本　勝他　1984　「須恵器について」『陰田』建設省中国地方建設局倉吉工事事務所
米子市教育委員会

土生田純之　1991　「伯耆における横穴式石室の受容と展開」『日本横穴式石室の系譜』学生社

弘田和司他　1996　『西大沢古墳群・畑ノ平古墳群・虫尾遺跡・黒土中世墓・茂平古墓・茂平城』
地域振興整備公団　岡山県教育委員会

村上幸雄　1980　『稼山古墳群』Ⅱ　久米開発事業に伴う文化財調査委員会

山磨康平　1988　『鳩ケ岩古墳』岡山県文化財保護協会

表1　土器観察表

掲載番号	出土遺構	出土地	器種	口径	最大径	底径	器高	特徴・調整	胎土	色調	備考
1	1号墳	石室前庭	杯蓋	12.4			3.8	天井部：ヘラ切り後ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰白 (2.5Y7/1)、黄灰 (2.5Y5/1)	
2	1号墳	石室前庭	杯身	10.0	12.2		4.6	杯底部：ヘラ切り未調整　外内面：ナデ	2㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰（7.5Y6/2）	
3	1号墳	石室前庭	杯身	11.1	13.0		3.7	杯底部：ヘラ切り未調整　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：黄灰（2.5Y6/1） 内面：灰白（2.5Y7/1）	
4	1号墳	石室前庭	杯身	10.6	12.8		3.6	杯底部：ヘラ切り未調整　工具痕あり 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰（5Y6/1）、灰白（5Y7/1）	
5	1号墳	石室前庭	杯身	10.6	13.1		3.2	杯底部：ナデ　板状工具による工具痕あり 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰（N6/1・N5/1） 内面：灰（5Y6/1）	
6	1号墳	石室内	杯身	9.1	9.4		3.9	杯底部：ヘラ切り未調整　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：黄灰（2.5Y6/1） 内面：灰（5Y4/1）	
7	1号墳	石室内	杯身	11.2		7.6	5.2	外内面：ナデ	2㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰（10Y6/1）	
8	1号墳	石室前庭	壺	4.1	6.2		5.8	外内面：ナデ 底部：ヘラケズリ後ナデ・ユビオサエ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰（5Y6/1）	
9	1号墳	石室前庭	平瓶	7.1	16.7		15.3	外内面：ナデ 底部：ヘラケズリ・ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：黄灰（2.5Y6/1）	底部に焼成後穿孔あり自然釉あり
10	1号墳	石室前庭	平瓶	8.4	18.8		15.0	外面：ヘラケズリ、カキメ　内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰黄（2.5Y6/2）	
11	1号墳	石室前庭	長頸壺	10.2	16.2	8.6	21.2	外内面：ナデ	3㎜以下の砂粒(中)	外内面：黄灰（2.5Y6/1）	
12	1号墳	石室内	長頸壺	-	16.0	8.8	(20.8)	外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰（N5/）	
13	1号墳	石室内	長頸壺	8.5	15.6	8.8	23.5	外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰（7.5Y5/1）	
14	1号墳	石室前庭	長頸壺	9.9	18.0	9.3	23.3	外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰白（5Y7/1)・灰（5Y6/1）	自然釉あり
15	1号墳	東側斜面	杯蓋	11.7			3.4	天井部：周辺部ヘラケズリ、ヘラ切り未調整 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰（10Y5/1） 内面：灰（7.5Y5/1）	
16	1号墳	墳丘縦断トレンチ	杯蓋	11.8			3.7	天井部：周辺部ヘラケズリ、ヘラ切り未調整 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰白（2.5Y7/1） 内面：灰白（5Y7/2）	
17	1号墳	墳丘横断トレンチ	杯蓋	12.4			(3.6)	天井部：周辺部ヘラケズリ　ヘラ切り未調整 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：にぶい黄(2.5Y6/3) 内面：灰黄（2.5Y7/2）	
18	1号墳	東側斜面	杯蓋	12.4			4.0	天井部：ヘラケズリ後ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰黄(2.5Y6/2)	
19	1号墳	東側斜面	杯蓋	12.4			4.3	天井部：雑なナデ　外面：ナデ 内面：ナデ後一方向にナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰黄(2.5Y6/2) 内面：黄灰（2.5Y5/1）	
20	1号墳	墳丘横断トレンチ	杯蓋	12.4			3.8	天井部：ヘラ切り未調整 外面：ナデ　内面：ナデ後一方向にナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰オリーブ(5Y6/2) 内面：灰（5Y6/1）	
21	1号墳	北東側斜面	杯蓋	11.7			3.4	天井部：ヘラ切り後ナデ？ 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：黄灰（2.5Y6/1） 内面：灰黄（2.5Y6/2）	ヘラ記号あり
22	1号墳	東側斜面	杯身	8.7	10.7		2.2	外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰（7.5Y5/1） 内面：灰（5Y5/1）	
23	1号墳	北東側斜面	杯身	9.0	11.2		3.2	杯底部：ヘラ切り後ナデ　外面：ナデ 内面：ナデ後一方向にナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：褐灰（10YR6/1） 内面：黄灰（2.5Y5/1）	
24	1号墳	前庭 東側斜面	杯身	9.9	12.9		3.6	杯底部：ヘラ切り未調整　外面：ナデ 内面：ナデ後一方向にナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰オリーブ（5Y6/2）	
25	1号墳	北東側斜面	杯身	10.2	12.3		3.5	杯底部：ヘラケズリ・ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰（5Y5/1） 内面：灰オリーブ(5Y6/2)	やや焼成不良
26	1号墳	東側斜面	杯身	10.4	12.7		3.7	摩滅により不明	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰黄（2.5Y7/2） 内面：褐灰（10YR6/1）	
27	1号墳	東側斜面	杯身	10.4	11.9		3.2	杯底部：周辺部ヘラケズリ、ナデ 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：黄灰（2.5Y6/1） 内面：灰白（2.5Y7/1）	
28	1号墳	北東側斜面	杯身	10.8	12.9		3.9	杯底部：ヘラ切り後ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰黄（2.5Y7/2）	やや焼成不良
29	1号墳	北東側斜面	杯身	11.2	13.2		(3.0)	杯底部：ヘラ切り未調整　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰（N5/）	
30	1号墳	東側斜面	杯身	10.6	13.1		(3.3)	杯底部：雑なナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰（5Y6/1）	
31	1号墳	墳丘横断トレンチ	杯身	10.4	13.1		(3.4)	杯底部：ヘラ切り後ナデ、工具による調整 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰黄（2.5Y7/2）	
32	1号墳	表土	杯身	11.1	13.2		3.0	杯底部：周辺部ヘラケズリ、ヘラ切り未調整 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰（N5/） 内面：灰（5Y7/1）	
33	1号墳	東側斜面	杯身	12.2	14.5		4.4	杯底部：ヘラ切り後ナデ、ユビオサエ 外面：ナデ　内面：ナデ後一方向にナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：にぶい褐(7.5Y6/3) 内面：灰黄褐（10YR6/2）	やや焼成不良
34	1号墳	墳丘横断トレンチ 東側斜面 石室前庭	杯身	10.6			5.2	杯底部：ヘラ切り後ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰黄（2.5Y7/2）	やや焼成不良 ヘラ記号あり
35	1号墳	北東側斜面	杯身	9.7 ～ 11.7			4.1	杯底部：粗いナデ調整　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰（5Y5/1）	歪んでいる
36	1号墳	北東側斜面	杯身	10.6			4.9	摩滅により不明（ナデ？）	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰白（2.5Y8/2）	焼成不良
37	1号墳	石室内 墳丘流土	高杯	14.6		12.2	14.6	外内面：ナデ　脚部：二段二方向透かし	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰（N5/） 内面：灰（N4/）	
38	1号墳	墳丘横断トレンチ 北東側斜面 2号墳石室内	平瓶	-	13.5		(9.6)	外面：カキメ、ナデ　内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰白（5Y7/1）、灰（5Y6/1） 内面：灰（5Y6/1）	

掲載番号	出土遺構	出土地	器種	口径	最大径	底径	器高	特徴・調整	胎土	色調	備考
39	1号墳	墳丘横断トレンチ 石室前庭 2号墳石室内	提瓶	6.4	16.6		21.7	口縁部：ナデ 体部：カキメ、ヘラケズリ後ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ	1㎜ほどの砂粒(中) 1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰（5Y6/1） 内面：灰黄（2.5Y6/2）	
40	1号墳	東側斜面	甕？ 横瓶？	12.8	-		(3.8)	外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰（7.5Y5/1）	
41	1号墳	東側斜面	把手				(5.6)	外内面：ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰黄褐（10YR5/2）	
42	1号墳	東側斜面	甕	-	-		(5.3)	口縁部：ナデ　体部内面：ヘラケズリ	1～2㎜ほどの砂粒(少) 1㎜以下の砂粒(多)	外面：浅黄橙（10YR8/3） 内面：灰白（10YR8/2）	
43	2号墳	石室内	杯蓋	12.8			4.1	天井部：ヘラケズリ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰（5Y5/1） 内面：灰（7.5Y5/1）	
44	2号墳	石室内 石室裂込土	杯蓋	12.4			4.4	天井部：ヘラ切り後ナデ、ユビオサエ 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰黄（2.5Y6/2）	
45	2号墳	東側斜面	杯蓋	11.8			3.9	天井部：ヘラケズリ？後ナデ　外内面：ナデ	1㎜ほどの砂粒(中) 1㎜以下の砂粒(多)	外面：灰黄褐（10YR6/2） 内面：黄灰（2.5Y6/1）	
46	2号墳	東側斜面 1・2号墳間	杯蓋	12.0			3.8	天井部：周辺部ヘラケズリ、ヘラ切り未調整 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰黄（2.5Y6/2） 内面：浅黄灰（2.5Y7/3）	
47	2号墳	北辺	杯蓋	12.2			4.2	天井部：周辺部ヘラケズリ、ヘラ切り未調整 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰黄（2.5Y6/2） 内面：にぶい黄(2.5Y6/3)	
48	2号墳	北東側斜面	杯蓋	12.3			3.5	外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰（N6/） 内面：灰白（N7/）	
49	2号墳	北東側斜面 東側斜面	杯蓋	12.8			3.7	天井部：ヘラケズリ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰白（2.5Y7/1） 内面：浅黄（2.5Y7/3）	
50	2号墳	北辺	杯蓋	12.4			4.0	天井部：ヘラケズリ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(多)	外内面：灰黄（2.5Y6/2）	
51	2号墳	東側斜面	杯身	10.4	12.7		4.0	杯底部：ヘラケズリ？後ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰オリーブ（5Y6/2） 内面：灰（5Y6/1）	
52	2号墳	北東側斜面	杯身	10.8	13.4		3.4	杯底部：ヘラケズリ後ナデ　外面：ナデ 内面：ナデ後一方向にナデ	1㎜以下の砂粒(多)	外面：灰（N4/） 内面：灰（N6/）	
53	2号墳	墳丘縦断トレンチ	杯身	11.6	14.4		3.8	杯底部：雑なナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰（5Y6/1） 内面：灰オリーブ（5Y6/2）	
54	2号墳	北東側斜面	短頸壺	6.8	11.7		7.6	外内面：ナデ 底部：ヘラケズリ、工具痕あり	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰白（N7/）～灰（N5/）	
55	2号墳	南側斜面 3号墳周溝 T－2	平瓶	8.2	20.7		22.3	外面：ナデ、カキメ　内面：ナデ	1㎜ほどの砂粒(中) 1㎜以下の砂粒(多)	外面：灰白（7.5Y7/1） 内面：灰（7.5Y5/1）	
56	3号墳	東側斜面	杯蓋	12.2			4.6	天井部：ヘラ切り後雑なナデ 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰黄（2.5Y7/2） 内面：灰白（2.5Y8/2）	焼色不良
57	3号墳	東側斜面	杯蓋	12.8			(3.6)	天井部：ヘラケズリ後ナデ？　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：黄灰（2.5Y6/1） 内面：灰黄（2.5Y6/2）	
58	3号墳	墳丘横断トレンチ	杯身	8.5	11.1		(3.0)	杯底部：ヘラ切り後雑なナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰（N5/）	
59	3号墳	石室前庭	杯身	9.0	10.9		3.3	杯底部：ヘラ切り後ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰黄（2.5Y6/2） 内面：黄灰（2.5Y5/1）	
60	3号墳	石室前庭	杯身	9.0	11.0		3.0	杯底部：ヘラ切り後ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：黄灰（2.5Y6/1） 内面：灰（5Y5/1）	杯底部にヘラ記号あり
61	3号墳	東側斜面	杯身	10.0	11.8		3.7	杯底部：ヘラ切り未調整　外内面：ナデ	1㎜ほどの砂粒(中) 1㎜以下の砂粒(中)	外面：灰（7.5Y5/1） 内面：灰（N4/）	
62	3号墳	東側斜面	杯身	11.1	13.3		4.0	杯底部：ヘラ切り後ナデ、板状工具による工具痕あり	1㎜以下の砂粒(少)	外内面：灰（N5/）	
63	3号墳	東側斜面	杯身	12.1	14.6		(2.9)	外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰黄褐（10YR4/2）	
64	3号墳	墳丘流土 墳丘縦断トレンチ	平瓶	(6.3)	-		(15.1)	外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰（7.5Y4/1）	
65	3号墳	流土 1号墳表土 T－2	甕	18.6	-		(7.0)	口縁部：ナデ　体部：カキメ	1㎜ほどの砂粒(中) 1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰黄（2.5Y6/2）	
66	3号墳	東側斜面 周溝	甕	24.9	-		(8.3)	口縁部：ナデ　体部外面：カキメ 体部内面：タタキ目	1㎜以下の砂粒(中)	外内面：灰黄（2.5Y6/2）	
67	1区	表土	縄文土器	-	-	-	(4.5)	外面：押型文　内面：ナデ	1㎜ほどの砂粒(中) 1㎜以下の砂粒(中)	外面：橙（7.5YR7/6） 内面：にぶい黄橙（10YR7/3）	
68	表土		杯蓋	12.6			3.5	天井部：ヘラ切り後雑なナデ　工具痕あり 外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(中)	外面：黄灰（2.5Y6/1） 内面：褐灰（10YR6/1）	
69	表土		杯身	10.8	13.2		3.4	杯底部：ヘラ切り後ナデ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰黄（2.5Y6/2） 内面：灰（N6/）	
70	トレンチ内		杯身	12.7	14.4		3.9	杯底部：ヘラケズリ　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：灰（5Y4/1） 内面：オリーブ黒（5Y3/1）	
71	表土		杯身	12.2			(4.1)	杯底部：ヘラ切り後未調整　外内面：ナデ	1㎜以下の砂粒(少)	外面：褐灰（10YR6/1） 内面：灰白（10YR7/1）	

（単位はcm）

表２　鉄器観察表

掲載番号	出土遺構	出土地	器種	全長	幅	厚さ	重さ	備考
M１	１号墳	石室内床面	大刀	110.8	4.6	0.9	1277.21	木質痕あり
M２	１号墳	石室内床面	刀	49.6	3.8	0.9	486.4	鍔、鎺、足金具付着 木質痕あり
M２－１	１号墳	石室内床面	足金具	(3.4)	(2.4)	0.3	(4.97)	
M２－２	１号墳	石室内床面	足金具	5.4	2.9	0.3	-	一部欠損
M２－３	１号墳	石室内床面	鍔	6.2	4.3	0.5	-	
M３	１号墳	石室内床面	懸通孔金具	1.3	0.9	0.2	1.72	
M４	１号墳	石室内埋土	懸通孔金具	1.3	1.0	0.2	1.71	
M５	１号墳	石室内床面	責金具	(2.0)	1.1	0.2	(1.31)	一部欠損
M６	１号墳	石室内埋土	責金具	(2.6)	0.6	0.2	(1.00)	一部欠損
M７	１号墳	石室内床面	責金具	(2.5)	0.5	0.2	(1.03)	一部欠損
M８	１号墳	石室内床面	責金具	(3.5)	0.7	0.3	(1.96)	一部欠損
M９	１号墳	石室内床面	鞘金具	(2.3)	(1.9)	0.2	(3.02)	布目付着　一部欠損
M10	１号墳	石室内	鞘金具	(3.2)	(1.7)	0.2	(2.8)	一部欠損
M11	１号墳	石室内	鞘金具	4.0	(2.6)	0.3	(8.8)	布目付着　一部欠損
M12	１号墳	石室内床面	鞘金具	3.9	(2.7)	0.2	(7.53)	一部欠損
M13	１号墳	石室内	鞘金具	(4.3)	(2.8)	0.3	(7.73)	布目付着　一部欠損
M14	１号墳	石室内床面	鞘金具	4.7	(2.9)	0.3	(10.81)	布目付着　一部欠損
M15	１号墳	石室内	鞘金具	4.9	(3.0)	0.3	(13.7)	木質痕あり　一部欠損
M16	１号墳	石室内	刀子	(5.7)	1.4	0.3	(4.79)	一部欠損
M23	２号墳	石室内	刀子	11.5	1.4	0.4	11.72	茎部に木質痕
M30	３号墳	Ｔ３	有袋鉄斧	11.9	5.0	1.5	308.12	

（単位はcm、ｇ）

表３　耳環観察表

掲載番号	出土遺構	出土地	器種	種別		全長	外径	内径	断面径	重さ
M17	１号墳	石室内	耳環	鉄地銀張	中実	2.95	3.24	1.73	0.72	25.12
M18	１号墳	石室内	耳環	鉄地金銅張	中実	2.52	2.93	1.74	0.69	15.63
M19	１号墳	石室内	耳環	銅芯金張	中実	2.58	2.91	1.63	0.70	22.77
M20	１号墳	石室内	耳環	銅芯金張	中実	2.61	2.89	1.59	0.63	22.37
M21	１号墳	石室内	耳環	鉄地金銅張	中実	2.65	2.88	1.37	0.73	21.17
M22	１号墳	石室内	耳環	鉄地金銅張	中実	2.61	2.78	1.42	0.74	16.18
M24	２号墳	石室内	耳環	鉄地金銅張	中実	3.06	3.38	1.78	0.83	30.3
M25	２号墳	石室内	耳環	銅芯銀張	中実	2.71	2.98	1.59	0.72	19.5
M26	２号墳	石室内	耳環	鉄地金銅張	中実	2.35	2.65	1.54	0.54	12.0
M27	２号墳	石室内	耳環	鉄地金銅張	中実	2.32	2.60	1.51	0.50	11.7
M28	２号墳	石室内	耳環	鉄地金銅張	中実	1.75	1.88	1.15	0.32	4.9
M29	２号墳	石室内	耳環	銀芯	中実	(1.52)	(1.1)	(0.81)	0.22	0.69

（単位はcm、ｇ）

表４　玉類観察表

勾玉

掲載番号	出土遺構	出土地	器種	全長	幅	孔径	重さ	材質
Ｊ１	１号墳	石室内	勾玉	3.29	2.33	0.28	9.61	瑪瑙
Ｊ２	１号墳	石室内	勾玉	3.33	2.05	0.3	7.98	瑪瑙
Ｊ３	１号墳	石室内	勾玉	3.11	1.74	0.2	5.72	瑪瑙
Ｊ４	１号墳	石室内埋土	勾玉	2.97	1.68	0.33	5.19	瑪瑙
Ｊ５	１号墳	石室内	勾玉	2.43	1.47	0.16	4.05	瑪瑙
Ｊ６	１号墳	石室内	勾玉	(1.79)	1.50	0.15	(2.83)	瑪瑙
Ｊ７	１号墳	石室内	勾玉	2.59	1.36	0.28	2.68	滑石
Ｊ148	２号墳	石室内埋土	勾玉	3.19	2.12	0.33	8.03	瑪瑙

管玉

掲載番号	出土遺構	出土地	器種	全長	幅	孔径	重さ	材質
Ｊ８	１号墳	石室内	管玉	2.95	0.97	0.35	4.92	碧玉
Ｊ９	１号墳	石室内	管玉	2.54	0.96	0.33	3.93	碧玉
Ｊ10	１号墳	石室内	管玉	2.43	1.1	0.25	5.01	碧玉
Ｊ11	１号墳	石室前庭	管玉	(2.36)	1.3	0.25	(3.56)	碧玉
Ｊ12	１号墳	石室内	管玉	2.38	0.82	0.27	3.54	碧玉
Ｊ13	１号墳	石室内	管玉	2.36	0.73	0.37	2.31	碧玉
Ｊ14	１号墳	石室内	管玉	2.15	0.98	0.3	3.95	碧玉
Ｊ15	１号墳	石室内埋土	管玉	1.98	0.91	0.26	2.93	碧玉

切子玉

掲載番号	出土遺構	出土地	器種	全長	幅	孔径	重さ	材質
Ｊ16	１号墳	石室内	切子玉	1.93	1.46	0.36	4.9	水晶
Ｊ17	１号墳	石室内	切子玉	1.73	1.2	0.35	3.01	水晶
Ｊ18	１号墳	石室内	切子玉	1.51	1.17	0.3	2.47	水晶
Ｊ19	１号墳	石室内	切子玉	1.35	1.22	0.31	2.58	水晶
Ｊ20	１号墳	石室内埋土	切子玉	1.08	1.24	0.3	1.69	水晶

玉

掲載番号	出土遺構	出土地	器種	全長	幅	孔径	重さ	材質
Ｊ21	１号墳	石室内	丸玉	1.09	1.34	0.23	2.41	滑石
Ｊ22	１号墳	石室内	丸玉	1.08	1.3	0.33	2.42	滑石
Ｊ23	１号墳	石室内	丸玉	0.98	1.28	0.35	2.24	滑石
Ｊ24	１号墳	石室内	丸玉	0.91	1.24	0.38	2.32	滑石
Ｊ25	１号墳	石室内	丸玉	0.93	1.23	0.3	2.31	滑石
Ｊ26	１号墳	石室内	丸玉	1.1	1.14	0.29	1.92	滑石
Ｊ27	１号墳	石室内	丸玉	0.8	1.14	0.29	1.41	滑石
Ｊ28	１号墳	石室内	丸玉	0.68	0.9	0.27	0.77	水晶
Ｊ149	２号墳	石室内	丸玉	1.04	0.89	0.32	1.76	滑石
Ｊ29	１号墳	石室内	土玉	0.98	1.1	0.12	0.99	土製
Ｊ30	１号墳	石室内	土玉	0.96	1.1	0.13	0.91	土製
Ｊ31	１号墳	石室内	土玉	1.0	0.95	0.13	1.16	土製
Ｊ32	１号墳	石室内	土玉	0.99	1.05	0.17	0.86	土製
Ｊ33	１号墳	石室内	土玉	0.98	1.02	0.09	1.02	土製
Ｊ34	１号墳	石室内	土玉	0.9	1.01	0.11	0.68	土製
Ｊ35	１号墳	石室内	土玉	0.88	0.99	0.19	0.73	土製
Ｊ36	１号墳	石室内	土玉	0.92	0.96	0.2	0.69	土製
Ｊ37	１号墳	石室内	土玉	0.9	0.95	0.17	0.68	土製
Ｊ38	１号墳	石室内	土玉	1.03	0.91	0.19	0.91	土製
Ｊ39	１号墳	石室内	土玉	0.96	0.91	0.14	0.88	土製
Ｊ40	１号墳	石室内	土玉	0.88	0.89	0.14	0.56	土製
Ｊ41	１号墳	石室内	土玉	0.83	0.88	0.14	0.68	土製
Ｊ42	１号墳	石室内	土玉	0.83	0.76	0.19	0.48	土製
Ｊ43	１号墳	石室内	土玉	0.83	0.71	0.22	0.39	土製
Ｊ44	１号墳	石室内	土玉	0.91	0.7	0.19	0.52	土製
Ｊ45	１号墳	石室内	土玉	0.79	0.61	0.13	0.3	土製

（単位はcm、ｇ）

表5　ガラス玉観察表

掲載番号	出土遺構	出土地	重さ(g)	色調	備考
J 46	1号墳	3区埋土	1.12	白色	鉛ガラス
J 47	1号墳	1区埋土	0.61	濃い青	
J 48	1号墳	1区埋土	0.58	濃い青	
J 49	1号墳	1区埋土	0.47	濃い青	
J 50	1号墳	1区埋土	0.41	濃い青	
J 51	1号墳	1区埋土	0.41	濃い青	
J 52	1号墳	1区埋土	0.34	濃い青	
J 53	1号墳	2区	0.33	濃い青	
J 54	1号墳	1区	0.28	濃い青	
J 55	1号墳	1区	0.23	濃い青	
J 56	1号墳	1区埋土	0.17	青	
J 57	1号墳	1区埋土	0.18	濃い青	
J 58	1号墳	1区	0.17	濃い青	
J 59	1号墳	1区埋土	0.15	濃い青	
J 60	1号墳	1区埋土	0.15	濃い青	
J 61	1号墳	1区	0.18	濃い青	
J 62	1号墳	1区	0.1	水色	
J 63	1号墳	4区	0.09	水色	
J 64	1号墳	石室埋土水洗	0.12	水色	
J 65	1号墳	4区	0.1	濃い青	
J 66	1号墳	2区	0.1	水色	
J 67	1号墳	床面	0.13	黄色	
J 68	1号墳	4区	0.11	濃い青	
J 69	1号墳	1区	0.1	水色	
J 70	1号墳	1区埋土	0.14	濃い青	
J 71	1号墳	4区	0.07	濃い青	
J 72	1号墳	床面	0.09	水色	
J 73	1号墳	1区	0.07	青	
J 74	1号墳	1区	0.09	水色	
J 75	1号墳	2区	0.09	水色	
J 76	1号墳	1区	0.06	濃い青	
J 77	1号墳	1区	0.09	濃い青	
J 78	1号墳	4区	0.07	水色	
J 79	1号墳	石室埋土水洗	0.06	濃い青	
J 80	1号墳	床面	0.09	濃い青	
J 81	1号墳	1区	0.09	濃い青	
J 82	1号墳	1区埋土	0.08	濃い青	
J 83	1号墳	石室埋土水洗	0.06	濃い青	
J 84	1号墳	床面	0.06	黄緑	
J 85	1号墳	1区埋土	0.07	濃い青	
J 86	1号墳	4区	0.05	水色	
J 87	1号墳	1区埋土	0.04	水色	
J 88	1号墳	石室埋土水洗	0.1	水色	
J 89	1号墳	1区	0.07	濃い青	
J 90	1号墳	1区	(0.06)	濃い青	
J 91	1号墳	1区	0.03	濃い青	
J 92	1号墳	1区埋土	0.05	水色	
J 93	1号墳	1区	0.05	水色	
J 94	1号墳	1区	0.07	濃い青	
J 95	1号墳	1区	0.06	水色	
J 96	1号墳	1区	0.05	水色	
J 97	1号墳	1区	0.05	濃い青	
J 98	1号墳	1区	0.05	黄緑	
J 99	1号墳	4区	0.07	水色	
J 100	1号墳	1区	0.05	水色	
J 101	1号墳	1区埋土	0.07	水色	
J 102	1号墳	1区	0.05	黄緑	
J 103	1号墳	1区	0.04	濃い青	
J 104	1号墳	1区	0.02	濃い青	
J 105	1号墳	1区埋土	0.04	水色	
J 106	1号墳	1区埋土	0.04	水色	
J 107	1号墳	1区	0.04	濃い青	
J 108	1号墳	1区	0.04	濃い青	
J 109	1号墳	1区	0.05	濃い青	
J 110	1号墳	4区	0.03	水色	
J 111	1号墳	1区	0.09	濃い青	
J 112	1号墳	1区	0.05	濃い青	
J 113	1号墳	1区埋土	0.03	濃い青	
J 114	1号墳	石室埋土水洗	0.03	水色	
J 115	1号墳	1区	0.06	黄緑	
J 116	1号墳	1区埋土	0.05	水色	
J 117	1号墳	1区	0.05	水色	
J 118	1号墳	1区	0.04	濃い青	
J 119	1号墳	1区	0.04	水色	
J 120	1号墳	1区	0.06	水色	
J 121	1号墳	1区埋土	0.04	水色	
J 122	1号墳	1区	0.04	濃い青	
J 123	1号墳	1区埋土	0.05	濃い青	
J 124	1号墳	1区埋土	0.04	水色	
J 125	1号墳	1区埋土	0.04	水色	
J 126	1号墳	1区	0.04	濃い青	
J 127	1号墳	1区埋土	0.03	水色	
J 128	1号墳	1区埋土	0.04	黄緑	
J 129	1号墳	1区	0.04	水色	
J 130	1号墳	4区	0.03	水色	
J 131	1号墳	1区	0.04	濃い青	
J 132	1号墳	1区埋土	0.04	濃い青	
J 133	1号墳	1区埋土	0.04	水色	
J 134	1号墳	1区	0.04	濃い青	
J 135	1号墳	2区埋土	0.05	水色	
J 136	1号墳	石室埋土水洗	0.02	水色	
J 137	1号墳	1区埋土	0.04	濃い青	
J 138	1号墳	1区床面	(0.03)	水色	
J 139	1号墳	1区床面	(0.02)	水色	
J 140	1号墳	1区埋土	0.04	濃い青	
J 141	1号墳	4区	0.02	濃い青	
J 142	1号墳	4区	0.03	濃い青	
J 143	1号墳	1区	0.02	水色	
J 144	1号墳	4区	0.03	水色	
J 145	1号墳	1区	0.03	濃い青	
J 146	1号墳	1区床面	(0.02)	水色	
J 147	1号墳	1区埋土	(0.02)	水色	
J 150	2号墳	石室埋土水洗	0.68	黄緑	
J 151	2号墳	石室埋土水洗	0.18	濃い青	
J 152	2号墳	頭骨周辺	0.1	濃い青	
J 153	2号墳	石室埋土水洗	0.08	濃い青	
J 154	2号墳	石室埋土水洗	0.1	濃い青	
J 155	2号墳	石室埋土水洗	0.1	濃い青	
J 156	2号墳	頭骨周辺	0.1	濃い青	
J 157	2号墳	石室埋土水洗	0.09	濃い青	
J 158	2号墳	頭骨周辺	0.08	水色	
J 159	2号墳	石室埋土水洗	0.07	濃い青	
J 160	2号墳	石室埋土水洗	0.11	濃い青	
J 161	2号墳	石室埋土水洗	0.08	水色	
J 162	2号墳	石室埋土水洗	0.09	濃い青	
J 163	2号墳	石室埋土水洗	0.05	水色	
J 164	2号墳	頭骨周辺	0.06	濃い青	
J 165	2号墳	頭骨周辺	0.06	濃い青	
J 166	2号墳	頭骨周辺	0.06	濃い青	
J 167	2号墳	石室埋土水洗	0.06	水色	
J 168	2号墳	頭骨周辺	0.04	濃い青	
J 169	2号墳	頭骨周辺	0.06	濃い青	
J 170	2号墳	石室埋土水洗	0.03	水色	
J 171	2号墳	石室埋土水洗	0.04	水色	
J 172	2号墳	石室埋土水洗	0.05	黄緑	
J 173	2号墳	石室埋土水洗	0.03	濃い青	
J 174	2号墳	頭骨周辺	(0.04)	青	
J 175	2号墳	石室埋土水洗	0.04	水色	
J 176	2号墳	頭骨周辺	0.04	濃い青	
J 177	2号墳	石室埋土水洗	0.03	濃い青	
J 178	2号墳	石室埋土水洗	0.05	黄緑	
J 179	2号墳	石室埋土水洗	0.04	水色	
J 180	2号墳	頭骨周辺	0.05	濃い青	
J 181	2号墳	石室埋土水洗	0.04	濃い青	
J 182	2号墳	石室埋土水洗	(0.01)	水色	
J 183	2号墳	石室埋土水洗	0.03	水色	
J 184	2号墳	頭骨周辺	0.05	水色	
J 185	2号墳	頭骨周辺	0.05	青色	
J 186	2号墳	頭骨周辺	0.05	青色	
J 187	2号墳	石室埋土水洗	0.04	黄緑	
J 188	2号墳	石室埋土水洗	0.03	水色	
J 189	2号墳	頭骨周辺	0.03	水色	
J 190	2号墳	石室埋土水洗	0.03	黄色	
J 191	2号墳	頭骨周辺	0.04	水色	
J 192	2号墳	石室埋土水洗	0.04	水色	
J 193	2号墳	頭骨周辺	0.04	水色	
J 194	2号墳	石室埋土水洗	0.03	水色	
J 195	2号墳	石室埋土水洗	0.04	濃い青	
J 196	2号墳	石室埋土水洗	0.02	水色	
J 197	2号墳	石室埋土水洗	0.02	水色	
J 198	2号墳	頭骨周辺	0.03	水色	
J 199	2号墳	頭骨周辺	0.02	水色	
J 200	2号墳	石室埋土水洗	0.03	濃い青	
J 201	2号墳	石室埋土水洗	0.02	濃い青	
J 202	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 203	2号墳	頭骨周辺	0.02	黄緑	
J 204	2号墳	頭骨周辺	(0.03)	黄緑	
J 205	2号墳	頭骨周辺	0.03	水色	
J 206	2号墳	頭骨周辺	0.01	濃い青	
J 207	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 208	2号墳	頭骨周辺	0.03	濃い青	
J 209	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 210	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 211	2号墳	頭骨周辺	(0.02)	濃い青	
J 212	2号墳	頭骨周辺	0.01	濃い青	
J 213	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 214	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 215	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 216	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 217	2号墳	石室埋土水洗	0.02	水色	
J 218	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 219	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 220	2号墳	頭骨周辺	0.02	濃い青	
J 221	2号墳	石室埋土水洗	0.02	濃い青	
J 222	2号墳	石室埋土水洗	0.02	水色	
J 223	2号墳	頭骨周辺	0.01	水色	
J 224	2号墳	石室埋土水洗	0.02	水色	

付載　水別古墳群出土の歯の鑑定について

1．はじめに

水別１号墳および２号墳では、ともに石室内より歯が検出されている。これらの歯について、小橋進氏（岡山県歯科医師会法歯会専務理事）に鑑定を依頼した。以下、その分析結果をのべる。

2．鑑定結果

(1)　水別１号墳出土歯

水別１号墳では石室内から約40点の歯が出土した。歯の多くは石室の奥壁側（１区・２区）から出土しており、周辺に散在する骨片とともに取り上げた。また、石室埋土を水洗した際にも歯が検出された。

１）石室内１区下顎骨片周辺

石室内南西部で下顎骨片が検出され、下顎の切歯、犬歯などが並んだ状態で出土した。歯の残存状況は、当古墳群の中では比較的良好で、中には歯冠に加え歯根も残っているものがあった。ほぼ一体分の永久歯が確認され、右側では上顎および下顎とも第３大臼歯を除くすべての歯が、また、左側では上顎第２切歯、上顎第３大臼歯および下顎第１～３大臼歯を除くすべての歯が確認された。歯は比較的大きく、摩耗もあまりみられないことから、この歯は20歳程度の男性のものであると推測される。

なお、下顎骨片に混じって、乳歯が５点検出された。検出された乳歯は上下左右の第２乳臼歯および右側下顎第１乳臼歯である。８歳前後の子供のものであると推測される。

２）石室内１区

石室内南西部隅で２点の永久歯を検出した。検出した歯は右側上顎第２大臼歯と左側下顎第２大臼歯である。磨滅は少ないが、やや小さめであることから20歳ぐらいの女性の可能性が否定できない。

石室内１区から水洗により３点の永久歯を検出した。検出した歯は右側下顎第１・２大臼歯と左側下顎第１小臼歯である。やや磨滅しており、年令は20歳後半で、男性の可能性がある。

３）石室内２区

石室内北東部で、水洗により３点の永久歯を確認した。歯は左側上顎第１・２切歯と左側下顎第１大臼歯である。歯は比較的大きく、また、磨滅も少ないことから20歳代前半の男性の可能性がある。

(2)　水別２号墳出土歯

水別２号墳では石室内北西部を中心に約16点の歯が出土している。その中で12点は石室内北東部隅で検出された頭骨片付近で検出された。また、石室内の埋土を水洗した際にも歯が検出された。

１）頭骨片周辺

頭骨片周辺では約12点の永久歯が検出された。歯は、一部並んで検出されたことなどから、すべて同一個体であると考えられる。残存状況はあまり良くなく、歯冠の表面のエナメル質が残存しているのみである。歯については、右側上顎で第２切歯、第１小臼歯、第１・２大臼歯が、右側下顎で犬歯、第１小臼歯が、左側上顎で犬歯、第２小臼歯、第１大臼歯が、左側下顎で第１小臼歯、第１・２大臼歯が出土した。これらの歯はいずれも咬耗が観察でき、大きさもやや小さめであることから、40～50歳の女性の可能性が考えられる。

２）石室内

石室埋土の水洗より歯が検出され、その中の４点について観察を行った。歯はいずれも右側下顎の永久歯で、犬歯、第１・２・３大臼歯に相当する部位であった。残存状況はあまり良くなく、歯冠のエナメル質が残っているだけであった。これらの歯は少し磨滅気味ではあるが、先述した頭骨片周辺で検出された歯ほど咬耗が激しいものではなかった。そのため、骨片周辺の歯とは別個体であり、大きさ等から20～30歳の男性と考えられる。

３．まとめ

以上の鑑定結果から、可能性として、１号墳では少なくとも男性３人（いずれも20歳代前後）、女性１人（20歳前後）、幼児１人（８歳前後）の５人以上が、また、２号墳では男性（20～30歳ごろ）と女性（40～50歳ごろ）の２人以上が埋葬されていたと考えられる。しかしながら、歯の残存状況は全般的に良くなく、検出された歯のほとんどが表面のエナメル質をかろうじて残すのみであり、初葬時の人骨の歯やあるいは老人の歯などは腐朽して残存していない可能性も否定できない。また、水洗で得られた鑑定不可能な細かな破片の中には、さらに多くの個体の歯が混在している可能性もあり、今回判明した個体以上の人数が埋葬されていた可能性もある。そして、歯の大きさおよび咬耗の程度は生前の個人差や生活習慣に大きく左右されるものであり、これらの条件をふまえた検証が必要であることはいうまでもない。

注）この文章は、小橋進氏の鑑定結果を氏の御指導・御助言のもと金田善敬（岡山県古代吉備文化財センター職員）が作成したものである。

第32図　水別１号墳石室内下顎骨片周辺部出土歯（1/1）

報告書抄録

ふりがな	みずわかれこふんぐん・みずわかれいせき
書名	水別古墳群・水別遺跡
副書名	一般県道別所下長田線雪寒（凍雪害防止）事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	131
編著者名	金田善敬　大橋雅也　柴田英樹
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL　086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-0824　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL　086-224-2111
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みずわかれ こふんぐん・ 水別古墳群・ みずわかれいせき 水別遺跡	おかやま 岡山県 まにわ 真庭郡 やつか 八束村 しもながた 下長田	33 588		35° 16' 50"	133° 44' 50"	19960422 ～ 19960423 19960624 ～ 19960930	400㎡	一般県道別所下長田線雪寒（凍雪害防止）事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水別古墳群	古墳	古墳時代	古墳3基	須恵器　土師器　鉄器 装身具	古墳時代後期から終末期にかけての古墳群
水別遺跡	散布地	旧石器	土壙	旧石器　須恵器	姶良火山灰層下から石器出土

図版１

１．１区調査前地形
（南から）

２．１区調査前地形
（東から）

３．水別古墳群全景
（東から）

図版２

１．１号墳調査前
（東から）

２．１号墳表土除去後
（東から）

３．１号墳全景
（東から）

１．１号墳石室
閉塞状況（北から）

２．１号墳石室前庭
左側壁　（南から）

３．１号墳石室前庭
右側壁　（北から）

図版４

１．１号墳石室奥壁
（東から）

２．１号墳石室
左側壁　（東から）

３．１号墳石室
右側壁　（東から）

１．１号墳石室
　玄門　（西から）

２．１号墳石室全景
　（東から）

図版６

１．１号墳石室内遺物
出土状況（東から）

２．１号墳石室内遺物
出土状況（西から）

３．１号墳石室内刀
出土状況（東から）

１．２号墳検出状況
（東から）

２．２号墳石室全景
（東から）

３．２号墳石室
（北から）

図版８

１．２号墳石室奥壁
（東から）

２．２号墳石室玄門
（西から）

３．２号墳石室内遺物
出土状況（東から）

１．３号墳調査前
（北から）

２．３号墳石室全景
（東から）

３．３号墳全景
（東から）

図版10

1．2区全景
（北から）

2．2区東壁断面
（西から）

3．石器出土状況

1

2

3

5

4

6

5

7

8

9

10

11

12

1号墳出土土器（1）（1/3）

図版12

13

14

1．1号墳出土土器（2）(1/3)

15

16

19

21

20

24

21

25

26

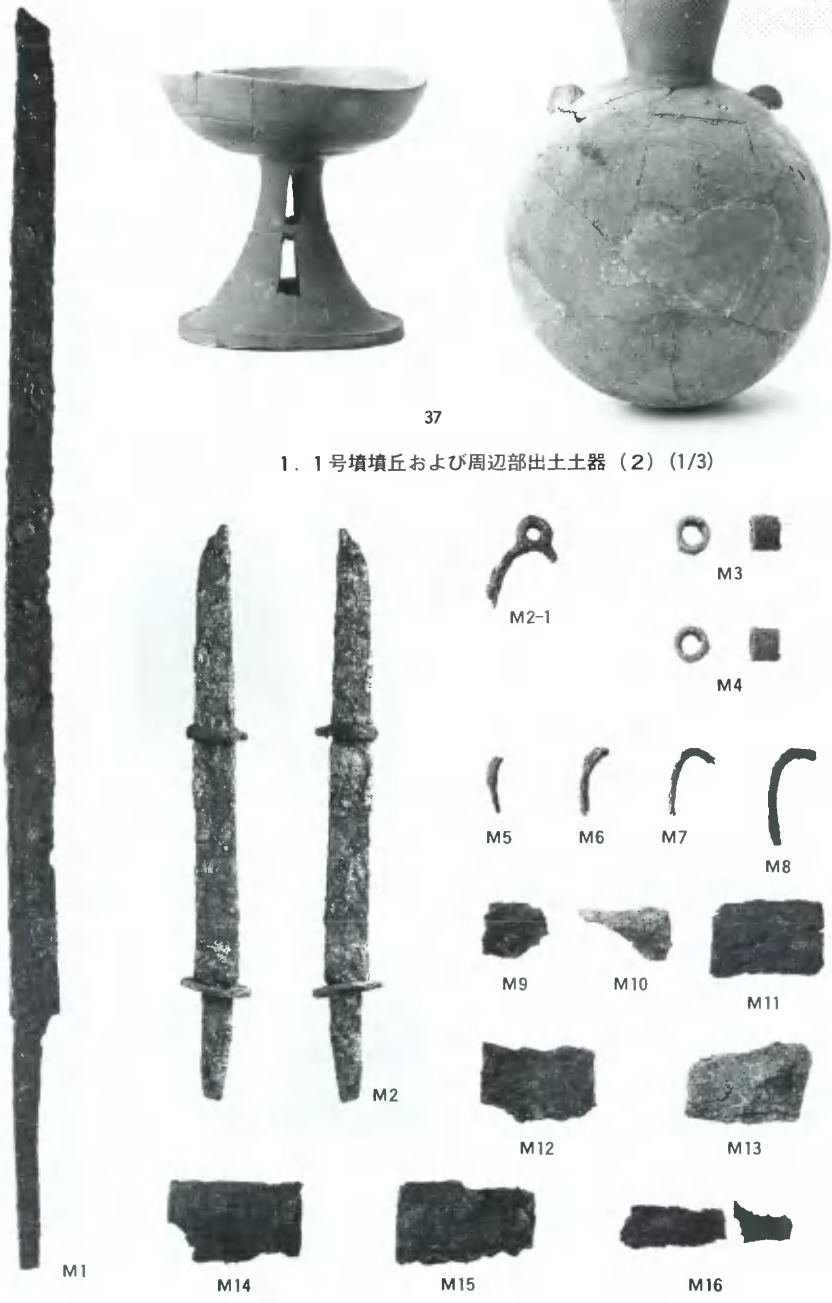
28

35

36

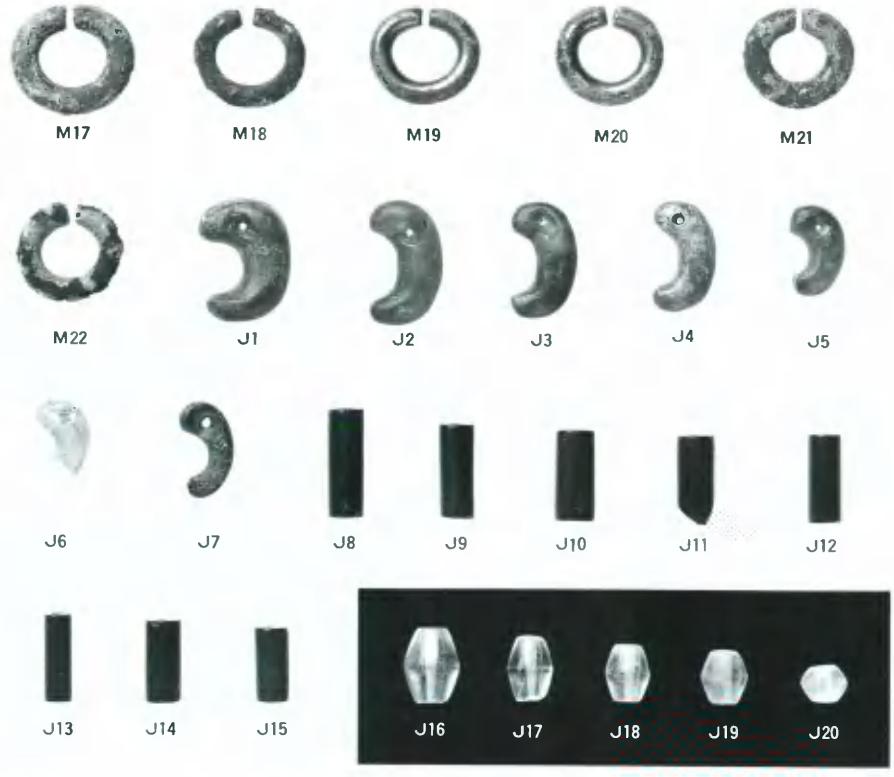
2．1号墳墳丘および周辺部出土土器（1）(1/3)

1．1号墳墳丘および周辺部出土土器（2）（1/3）

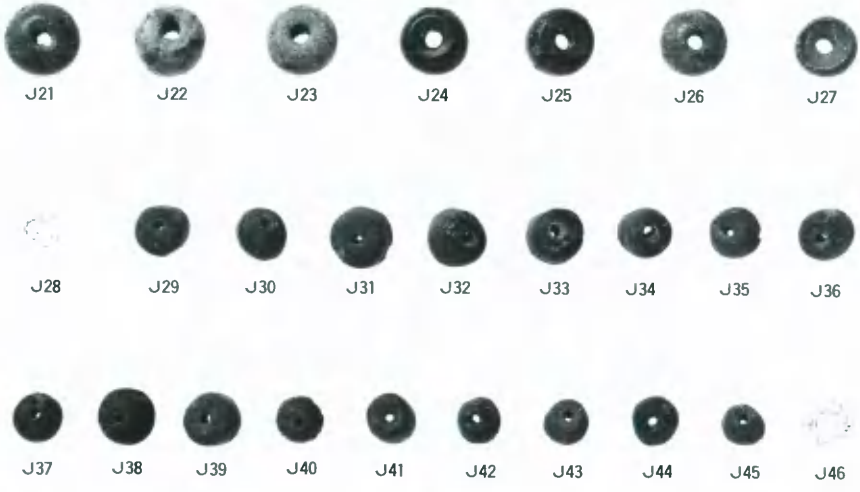


2．1号墳出土鉄器（1/5・1/2）

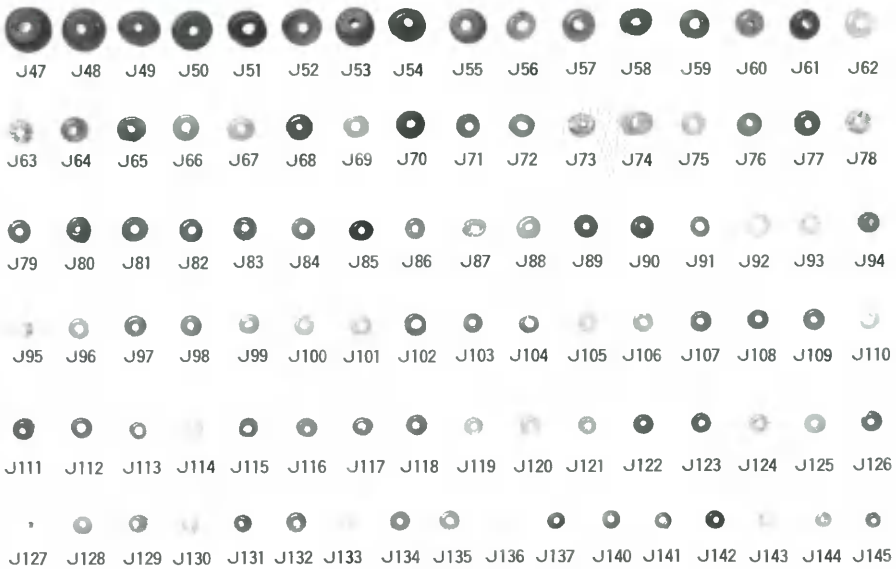
図版14



1．1号墳出土耳環・玉類（1）(2/3)



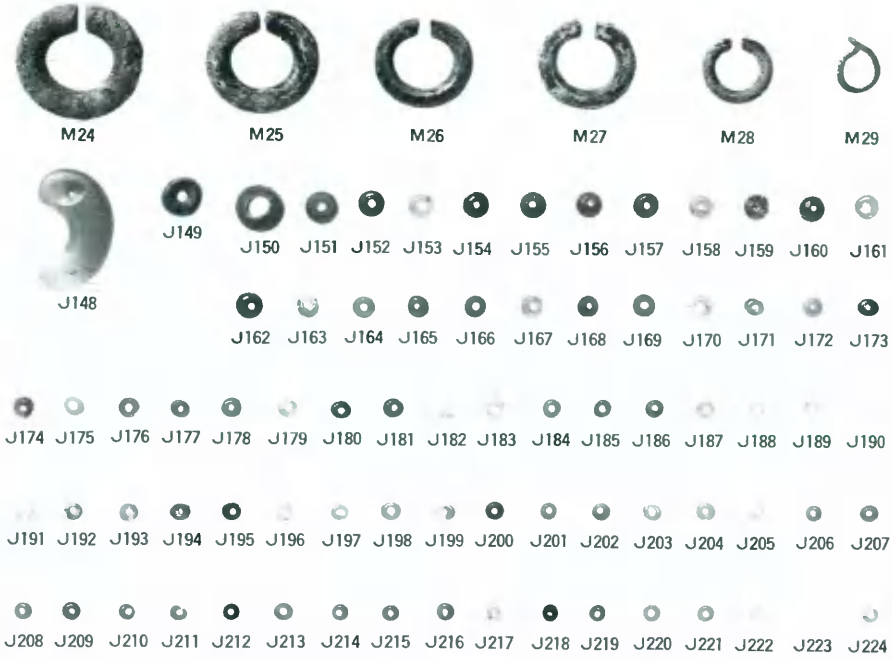
2．1号墳出土玉類（2）(1/1)



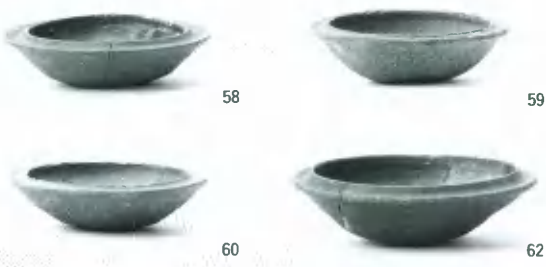
1．1号墳出土玉類（3）(1/1)

2．2号墳出土土器（1/3）・鉄器（1/2）

図版16



1．２号墳出土耳環（2/3）・玉類（2/3・1/1）



2．３号墳出土土器（1/3）・鉄器（1/3）

3．１区・２区出土土器（1/3）・石器（1/1）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告131

水別古墳群・水別遺跡

一般県道別所下長田線
雪寒（凍雪害防止）事業に伴う発掘調査

平成10年3月27日　印刷
平成10年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　岡山県教育委員会
印　刷　西日本法規出版㈱